

384.6

E41h

m



0054124000

0054124-000

384.6-E41h-m

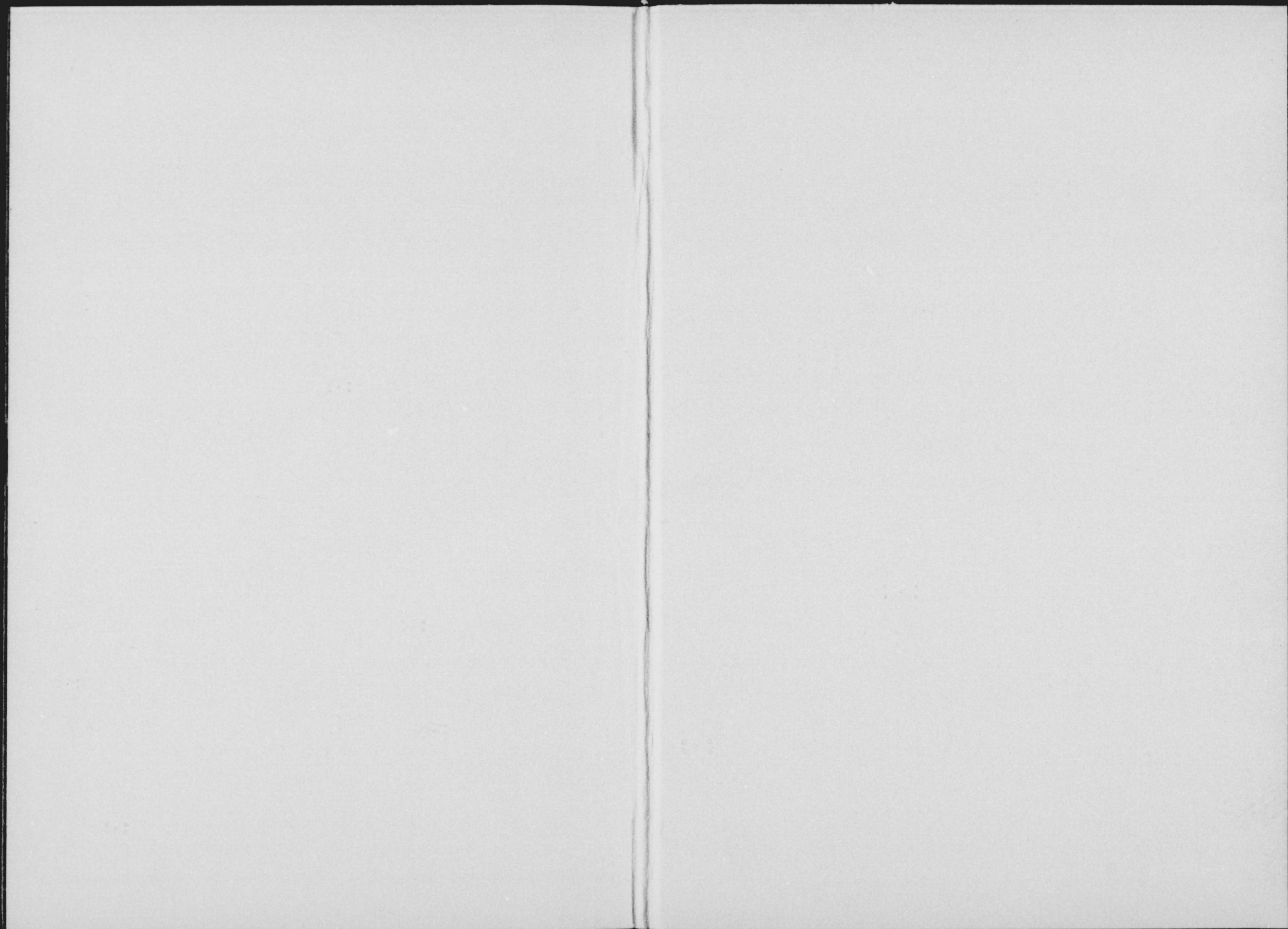
飛驒の女たち

江馬三枝子・著

三国書房

1943 3版

AIB



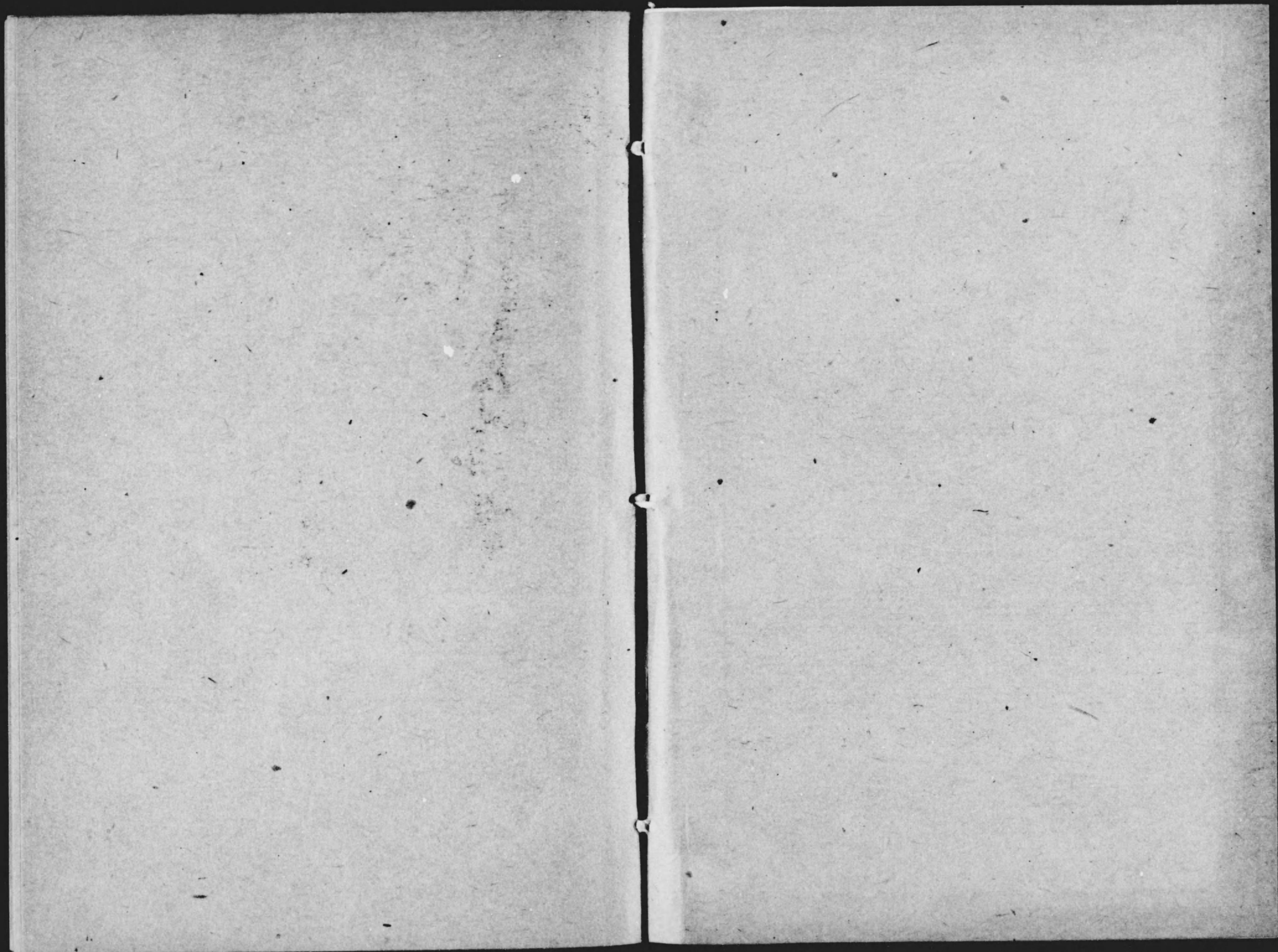
飛驒の女たち

江馬三枝子

384

E414

m



KI 2X-81

江馬三枝子著

飛驒の女たち

三國書房版

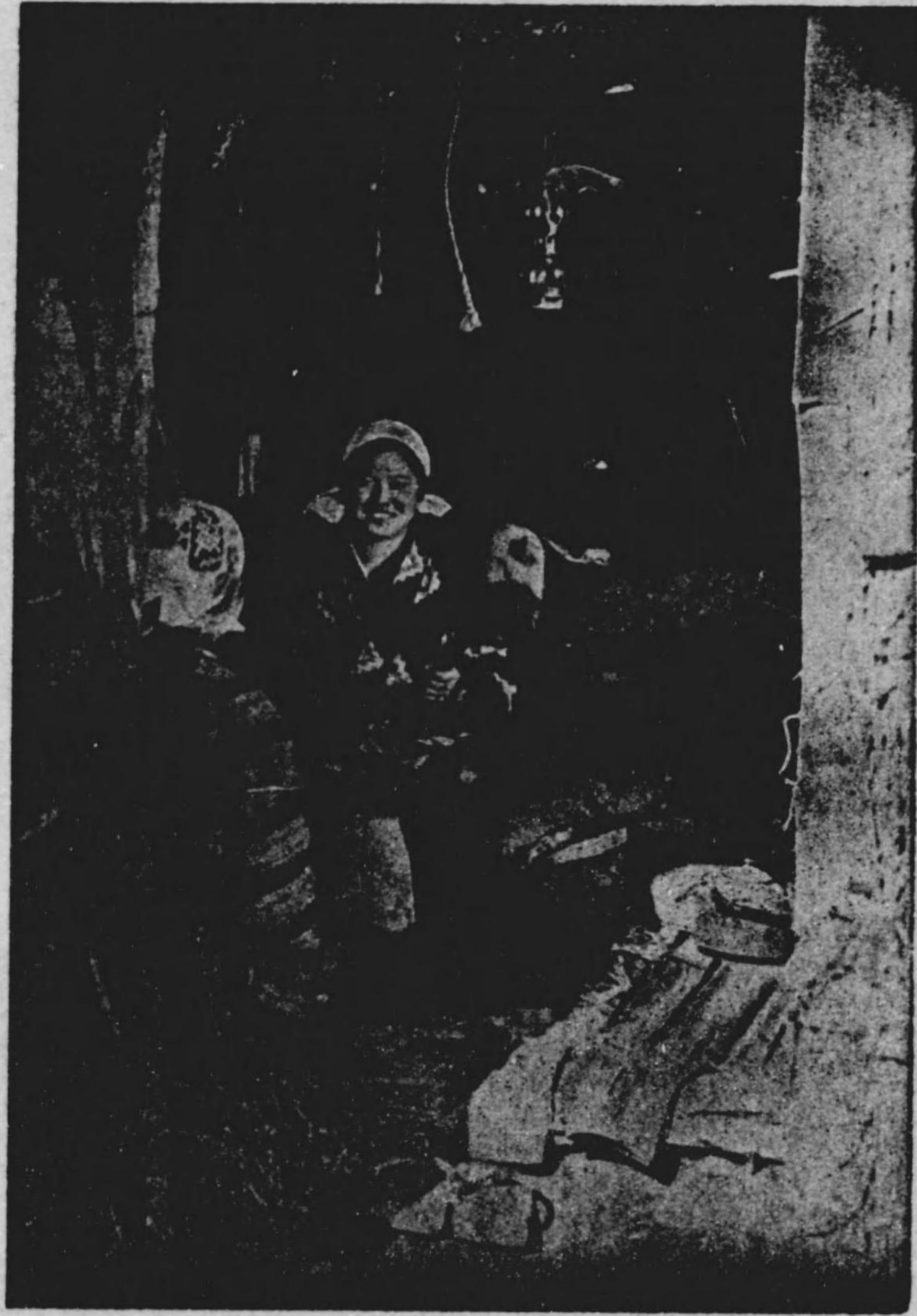
3846

E41九

m



219526



ちた嬢る造を粉ピラッ



白川村大族の家



白川村奥地にワイナを流るる橋ち

著者に贈る言葉

柳田國男

飛驒の白川を私が見てあるいたのは、明治四十年の六月、多分あなたがまだ小學校へ入られる前でありませう。前にも武陵桃源のやうなうわさ話を、語り傳へて居た者がありました。が、實地にこの溪谷を旅行した人の文章は、たゞ二つだけしか読んで居なかつたのです。現在一向に世に知られて居ないといふこと、それだけが我がに對しての大きな誘惑で、果してこの中から、新たにどういふ寶を見つけて還るのがよいかといふことも、まだ考へる力が無かつたやうに思はれるのであります。

土地の人たちの方でも、何を見に来るのか、何が知りたいのかを全く知らぬ風でありました。たま／＼物を尋ねてもたゞ一ことの答へをするだけで、伏目にさつさと行き過ぎてしまひます。それが三十何年の後になつて、是ほど色々な考へなければならぬことを、弘く日本の女性に語り得る土地になるだらうと、私で無くても誰が想像しませう。

この御本を拜見して、しみ／＼と思ひ出すことが幾つもありました。何よりも忘れられないことは、それは／＼寂しい旅でありました。ちやうど郭公のよく鳴く六月なかばで、村の人たちは皆山畑に登つて働いて居たのか、どの家も森閑として居りました。細い街道の曲り目の端まで、誰もあるいて居ないといふ處が何度もありました。さうして雨が折々降つて來たのであります。兩側の緑の山に雲がかゝると、一谷はたゞ流れの音だけになり、幽かに山の墓の聲が聽えて來たりしました。

飯島で見つけた越中のポッカに荷物を引繼いで、高山の案内者は天生を越えて歸つて行き、私は一人になつてしまひました。も一度友をさそつて來て見たらどうだらうといふことを、考へずには居られませんでした。

有りとある物みな濡るゝさみだれに飛驒の山川かちわたりせし

さういつた山あひの濁つた小流れも、せめてもの結縁として振りかへり望みつゝ、私は五箇山の方へ下つて來たのであります。

それから五年七年とたつうちに、故友川口孫治郎君がよくこの邊の山をあるいて時々東京へ來ては白川の話をしました。川口氏には一冊の著述さへあります。今の木曜會の同人の橋浦君や瀬川さんが、この山村に入ったのも同じ頃であります。それでもまだあなたの様な理解ある批評者が、親しく白川の女たちと、何度でも心を語りかはす機會などが、やがて來ようとは思つて居りませんでした。世の中の移り

變つて行くといふことは、何かにつけて不安ではありませんが、それが無かつたならばこの本も歡んで迎へられず、第一にあなたの日和下駄の音が、この深い谷底に響くやうなことも無かつたでせう。三十何年前には私などが、求める途すらも知らなかつたものを、もうあなたは見つけ出し、人に示さうとして居られるのであります。

前の旅の終り方には、私は伏木の港を訪れて、飛驒から流れて出る材木などを見ました。其頃の伏木はまだ静かなもので、埋立ての草原には、はた／＼ばかり澤山に飛んで居ましたが、年を隔て、再び往つて見ると、そこには見霞むほどの上屋が建ち並び、工場の煙は繁く、川は其間を力強く流れて海に注ぎ續けて居るのであります。同行の大間知山口の二君は、ゆくりなく爰で白川の話を私から聽いて、次の日は水源庄川の谷を、高山の方へ抜けて還つて來ました。山口君はこの夏なくなつてしまひ、大間知君は今新京に行つて働いて居ますが、多分この二人は私以上の深

い關心を以て、あなたが「ひだびと」に連載なされた木谷七戸の聞書を、愛讀して居たことであらうと思ひます。それで記念の爲に、私があゝの伏木の町の旅宿で、書いて二君に示した歌を残して置きます。年とつた者の癖です。笑つてはいけません。

我はこの射水の川のみなかみの細き流れをかつて見たりき

装 幀
挿 繪

今 純 三
白 川 幀 藏

自 序

この夏、文化映畫「ひだびと」が封切りされましたので、皆さんの中には御覽になつた方も少くないことゝ思ひます。この映畫は、奥飛驒の山村に於ける冬の生活を描いたもので、その製作に當つては私も幾分のお手つだひをしたものでしたが、飛驒の人たちは、特に飛驒を離れて都會で暮してゐられる飛驒の人たちは、この映畫について、當時こんな風に不平を云つてゐると云ふことが幾度か私たちの耳に傳はつてきました。

「飛驒びと」と云ふ題であんな山奥の暮らしを扱つてもらつたので、他國の人はあれをみて、たゞさへ飛驒は山國で猿と同居してゐる位に思はれてゐるのだから、飛

驛人と云へばみんなあんな暮らしをしてゐるものと思ふに違ひない」と云ふのです。あの映畫をみて、そんな風に思ふ方たちがあつたとすれば、もちろんそれは間違ひですが、少し尺を切られてもゐましたし、實際そんな方が多少はあつたかも知れないと思ひます。

同じ懸念は本書についてもあります。「飛驒の女たち」と題してはありますが、本文でもお断りしてありますやうに、私の扱つたものは主として、飛驒山村の女たちの生活です。讀まれる方はこの點特に意に留めて置いて頂き度く思ひます。ですから、町の女性の方々がこれを讀まれて、

「我々はもつとずつと文化レベルの高い生活をしてゐるのに」と不平を仰有つても私としましては如何とも仕方が御ざいませんし、また他國の讀者がこれを讀まれて、飛驒の女は、みんなこんな風な生活をしてゐるのだと思つて頂いても、私とし

ましてはその誤解に對して責任を負ふわけには參りません。

私は民俗學の一學徒として、飛驒の高山に住まひ、研究誌「ひだびと」を編輯しながらこの土地の民俗をもう大方十年近くも研究して來ました。そしてその時々の研究報告をこれまで幾つとなく「ひだびと」に發表してきました。本書は大部分それらを材としてこの主題のもとに綜合して一冊に新しく書きまとめたものです。若い婦人の方々に讀んでもらふ目的でしたので、専門的な書き方を止めて、せい／＼分り良く書いたつもりです。

さらに、民俗の研究方法に従つてゐるために、古いこと、昔のことを多く扱ひましたが、しかしそれは勿論現代の生活をより正しく認識するためですから、その點よく了解して頂きたく思ひます。現代の若い婦人たちがこれを讀まれて、日本婦人の生活ぶりについて、過去はもとより將來のことも、いろ／＼反省して頂くのに役

自序

立てば、それだけでももう本書の目的は達せられてゐます。

なほ挿畫は、高山在住の若い畫家白川幀藏さんに御厄介をおかけしました。ここに御禮を申し上げます。

昭和十七年晩秋

飛驒・高山にて

江馬三枝子

目次

序	
自序	
はしがき	
ツブラの中	一七
娘時代	四九
ヨメサの境遇	七五
カカサの勤め(一)	一〇九
カカサの勤め(二)	一三五

目次

白川村大家族の女たち	一六〇
町の女たち	一九三
女ばかりの行事	二二一
小町むすめ	二二九
農村婦人を擁護せよ	二四一

飛驒の女たち

はしがき

飛驒といへば、新聞や雑誌で「日本の屋根」とか、「日本のチベット」とか呼ばれてとかく世間の人々の好奇心の對象にされてゐる。そして甚だしいのになると、飛驒に住む人間と云へば、男も女も山人の種類で、熊や猿と一緒に暮してゐるかのやうに話し傳へられてゐる。

殊に飛驒の女となると、どこかのジャーナリストの面白半分の無責任な報告がもとで、何か節操も道徳もない放縱なものが多いやうに思はれてゐるやうである。その證據には私共を訪ねて來られる旅の人々の中にも、露骨にしかも非常に間違つた

自分たちの低級な常識をもつて、古いむかしの農村の娘たちの習俗を尋ねたり、何も飛驒に獨得だと云ふ譯でもない町の曖昧な女たちに對する好奇心を示されるものが少くない。これはもちろん飛驒びとに對するひどい侮辱であるが、それにも増して飛驒のやうに古い習俗を比較的失はずにゐる國へ旅をして來て、そんな事しか興味の対象になし得ないさうした人々の無智もまたあはれむべきではあるまいか。

實際、飛驒と云ふ國は信濃にまさるとも劣らぬ深い山國である。東の國境には御岳、乗鞍岳、燒岳、穂高岳、槍ヶ岳など、標高三千メートル内外の山岳から成る飛驒山脈、すなはち北アルプスが立ち並び、西の國境には白山が聳え、この代表的な山にて取圍まれた國內には、また幾百幾千と數知れぬ山々／＼が、高く峻しく縦横に浪打ち重り合つてゐる。中央にある小都市高山の盆地以外には一平方里に及ぶ平地と云ふものがない。全くよくもこんなに、念入りに大小無數の山々を作つたもの

だと、いや出來たものだと感嘆するばかりである。

現在は一市三郡五町二十六ヶ村であるが人口は十三萬餘、東京に丸ゞルが出來た當時一日にあの建物の中に吸込まれる人が十五萬餘、と云ふ事を片耳にした事があるが、これと比較してみるとわびしい程ばりつとした感じがする。高山市が海拔五七三メートル、そしてやゝ奥まつた村々は千メートル前後のものが珍らしくなく最も高い村は千二三百メートルの高い山ひだに塊まつてゐる始末で、田畑が乏しいのだから、多くの人間の住み得ないのも無理ではない。交通は昔から到つて不便で東西南北、どの方面から飛驒へ踏み入らうとしても、いくつかの峻しい峠でさへぎられてゐる。今日汽車が岐阜、富山間をつないで高山へ通じてゐるが、それがついたのはやうやく昭和九年も秋の暮、それまでは日本で汽車の通つてゐない唯一の國だつたのだ。むかしから飛驒が下々の下國と呼ばれ、丹波と並んで代表的な田舎と

されてゐたのも、まあ、あまり不平を云ふ譯にもゆかないであらう。

こんな状態であつたから他國の人たち、とりわけ都會の人たちが、獵奇的な興味をもつて、この國を眺めるやうになつたのも自然だと認めなければならぬ。それに前にも云つたやうに交通不便で、高山まで岐阜から三十六里、富山から二十四里、峻しい峠を幾つか越えてしかも歩いて來ねばならなかつたので、實地にこの土地を見聞したものが割合に少なかつた。だから素通りでもした人たちは、山奥の事を無責任にむやみに誇張して、語りひろめたのだから、いよく途方もない話が飛驒につき纏ふやうになつたのであらう。かつては奥深い山國であるために人々からかへり見られることなく、文明の恩恵にあづかることもとかく遅れがちであつたのであるが、今日では却つて、文明に恵まれない奥山の國であることによつて、世人の注意と興味をひきつけると云ふ甚だ皮肉な現象が起つたのである。

飛驒の地理的位置は、本州の中部山岳地帯に位する岐阜縣下の一國である。だから飛驒は勿論立派な日本の國土であり、住民はすぐれた日本人だと云つたら妙にひがみつばいと笑ひを買ふかも知れない。

江戸時代の初期には、金森氏の藩領であつたが、元祿五年金森家が出羽上ノ山へ移封を命ぜられてからすつと幕府の直轄領地となつた。いはゆる天領である。それで江戸幕府から初めは代官が後には郡代が派遣されて、高山の郡代役所に陣どつて、飛驒地方を統治してゐた。さういふ事情であつたから、武士階級としては郡代役所をめぐつて百人足らずの少數のものがあるにすぎず、いはゆる他國の藩領とくらべてみると武士とか士族とかいふ階級は、殆んど無いと云つても良いからるものだった。それで當地の住民と云へば、高山にいくらかの町人階級が町をかまへてゐる外は全部百姓と云つてよかつた。云はゞ飛驒は大方山村の農民たちで住民が構成さ

れてきたのであつた、この事情は今日に於いても大して變りが無い。

このやうに飛驒は信濃や甲斐と同じく、山村の國、農村の國なのである。決して他國と異つた特殊な民族が住んでゐるのでもなければ、特別異様な生活をしてゐるわけでも無い。この事は女にしたつて同様である。この點を讀者はまづしつかりと頭に留めて置いて頂きたい。

しかしながら、特別に奥深い山國であり、久しく中央の文化と遠ざかつてゐたせいで當然のことながら、またこの國獨得の生活様式や、古い遺風がかなり豊かに保たれてゐる事實は見のがすことが出来ない。そしてそれらが飛驒の山村民の生活を特色づけてゐることも争はれない。いちじるしい一例をあげれば、白川村の大家族制に見られる古い生活の遺制や、大家族の中に於ける女たちの特異な位置と生活の如きものがそれである。私はさうした特色をせい／＼委しく紹介したいつもりである。

る。だから、私がこれから述べようとするのは、山村に於ける女性の生活、あるひは生涯と云つた方がより適切であるかも知れぬが、終始飛驒の女たちの生活を材料として書いてゆくので、その限りこれはあくまで「飛驒の女たち」になるのである。」

ツブラの中

山村の女性たちの、女としての生活を語る前に、まづ彼女たちの生れと、育つ環境がどんなものであるか、こゝでは保健と衛生の方面から童女少女たちの生活をちよつと覗いてみる必要がある。

最近の調査によると、飛驒三郡二十六ヶ村のうち、醫者のゐない村が十五ヶ村に及んでゐる。つまり村の半数以上が醫療に恵まれてゐないのである。それに一村に一人の醫者のゐる村であつても、例へば奥丹生川村とか白川村とか云ふやうな廣大な村落になると遠方の部落は醫者の居住地から三里、四里、五里と離れてゐるから、

急場の場合は大方醫者が間に合はないのは云ふまでもなく、普通の病人でも何度も医療を受ける事なぞ思ひもよらない。だから事實上こんなところは無醫村も同様な状態である。さう云ふところになると村びとは醫者と云ふ存在を、医療を受けるためのものと思つてゐない。それでは何んだと考へてゐるか云ふと、醫院まではるばる死者の遺骸を運んで行つて、死亡診断書を書いてもらふ所と心得てゐる位である。どんな僻村でも死亡診断書なしには葬ひが出来ない。岐阜縣聯合久美愛病院の報告書を見ると、「死人があると村びとが總がかりで、千メートル前後の峠を或ひは原始林の間を搬出して、または數里の山中に雪路を作つて、屍體を搬出し、一枚の死亡診断書を得るのである。」こんな事實は都會の人々には、死者に對する敬意を欠いた行爲の様に聞えるかも知れない。しかし屍體を搬出するにしろ何にしろ、村人の協力に依つて、死後間もなく死亡診断書を貰ひ得るのは伴せと云はねばならぬ

い。白川村の中でも特に山奥の某村では、こゝ暫く以前まで毎春雪どけ季節に大勢の死者が出る。云ふまでもなく嚴寒中の死者の診断を得る事も、届出も出来なかつたからなのである。もちろんこれ等の話は飛驒でも最も深い奥村のことであるが、さうで無くても多少はこれに類似した氣の毒な状態なのである。病氣中に全く醫者にかゝらず死んでゆくものが寧ろ多いと云はねばならない。

村々に醫者が乏しいのと同様、いやそれにも増して助産婦、昔流の言葉で云ふならお産婆さんが乏しい。乏しいと云ふよりむしろ村には職業的な産婆のゐないのが普通である。

それではお産の時はどうするのかと云ふと、子供を澤山産んだ事のあるさかしい老女がたのまれて産婆役をするのである。そんな有様であるから産婦は子供を産む日まで、胎兒の位置を調べて貰ふ事もないし、自分の健康状態を診てもらひもしな

い。たゞ一筋に腹帯をゆるめたり、仕事をなまけて胎児を大きくし過ぎぬ様にとの
一點張りで産む日まで、普通の體の者よりも一層激しく働き続ける。周囲の者たち
も、それが妊娠した女の正しい生活態度だと考へてゐる。だから

「毎日便所を綺麗に掃除すると美しい赤ん坊が産れる」

などと云ふ俗信があるが、この俗信が全国的なものであるところをみると、何所で
も妊婦は働けば働いただけ良いと考へられてゐたものらしい。

それはとにかくとして、妊婦が健康でお産が順調である場合は、専門的な産婆が
ゐなくても、出産は病氣でないから一應は無事に済む。少くも済んで来た、しかし
一旦異常妊娠とか難産の場合には全くどうにもならない。経験のある助産婦か單な
る村醫者程度の助力で、危険状態を切抜けられる程度の軽いものでも、妊婦な
り胎児なり多くの場合その双方が、見す／＼犠牲とならなければならない。

しかも、年よりを産婆の代用品にでも頼める村は、まだしも良い方だと云はねば
ならない。特に名指しは遠慮して置くが、或る山奥の村ではその代用産婆さへも頼
む習慣がない。ではどうするのか。最初の出産の時に限つて、村の経験あるお婆さ
んが世話をしてやる。そして世話をしながら出産の際の心得を教へてやるのである。
二回目からは産婦は自分で赤ん坊を取あげ、自分で始末をしてしまふ。まさしく未
開民族のやり方だと云はねばならない。尤も現在でもこんなやり方をしてゐるのは、
當地でも二三の奥村にすぎないが。

かういふ状態が、過去數百年、いや數千年をとほして行はれて来たのである。こ
の事實は、彼女たちの間には難産といふやうな場合が比較的少くないこと、従つて
人々は妊娠と出産とを、今日の我々のやうに恐れてゐないと云ふ事を示してゐよう。
實際かうした事實は自然的現象なのであるから、自然に順調に行はれる場合には一

向恐れるに當らないのであらうが、假にも今日の文明の空気の中に育つた我々からみるといさゝか戦慄を禁じ得ない氣がする。

出産がこんな状態であるから産後はもつと簡単に片づけてしまふ。一週間も産褥についてゐるのは長い方である、たいていは三日目の忌が明けると起きて働いてゐる。極端なものになると、産婦が次の日から起きて、少しづつではあるが働いてゐるのさへ見かける。まつたく保健も衛生もありはしない。無事に過ぎて行くのが不思議でさへある。

かういふ環境の中へ生れてくる赤ん坊が、どんな育ち方をされるか、想像するのも難しいことではない。

赤ん坊は泣きさへすれば乳があてがはれる。その有様を見てゐると乳は榮養のた

めに授乳されるのでなくて泣き止めさせるためにやつてゐる様な印象である。勿論時間をきめての授乳なんか問題にならぬし、そんな事は多忙な彼女たちには到底實行も出来ないし、そんな事はおかしな話なのである。かと思ふと四五歳にもなつた大きな子供が母親の乳にぶらさがつてゐたりする。もう子供には少しも益のない、むしろ有害であり、母親の健康のためには想像以上に悪影響がある事が、どうしても呑込めぬのである。そのくせ、二三歳の小兒が、食事時には大人と同じ食事を平氣でしてゐる。だから農村へ行くと、やせてゐるのにお腹だけ太鼓の様に大きく、ぼん／＼になつてゐる子供が多い。

農家は眞冬を除いては年中忙がしい。だから赤ん坊や小さい子供はいくら泣いたつて叫んだつて放つて置かれる。子守位しか出来なくなつた年寄か子供のある家ならとにかく、多くは藁か板で作つた桶のやうなツブラの中へ入れて置かれる。殊に

田植時のやうな農繁期ともなれば、乳呑兒は本當に手足まとひになつてしまふ。ツブラの中へ入れたまゝ田の畦の小蔭にでも置かれるか、でなれば家の中へひとり残して置かれる。

江馬の長篇小説「山の民」第二部の中に明治元年、時の革新的な知事梅村速水はやみが田植時の農村を微行で視察する事が書いてある。途中大夕立におそはれて、梅村主従が或る貧しい百姓家へ飛びこんで暫く雨やどりをする。その時の情景をこんな風に描いてある。

『家の中は暗く、梅村の眼には殆んど煤色に映つた。飛びこんだのは二坪ばかりのでこぼこした土間で、左手には馬のゐない亂雑なマヤがあり、尿や腐敗した芝草やらの烈しい惡臭で、家中がむつとしてゐた。取つつきはやゝ廣い埃だらけの低い板の間の臺所で、火の氣のないキロリには粗末な藤蔓製のカギヅルが、眞つ黒な屋根

裏からぶらさがつてゐる。板の間には到るところ雨漏りがして、ビシヤ／＼音を立てゝゐた。

人は誰もゐなかつた。

梅村は一種の興味をもつて、貧しげな、がらんとした、暗い家の中を見廻してゐたが、フト眼を見はつた。やゝ奥まつた黒い細い柱の側に、藁で桶のやうな形に作つたツブラがあり、そこに一歳位な赤ん坊が入れてあつた。その赤ん坊の小さな顔に、蠅がまつ黒に見えるほど一面にたかつてゐたのである。赤ん坊は半ば眠りながら、ヒイ／＼と消え入るやうに微かな泣聲を立てゝゐる。察するところ、赤ん坊は蠅がうるさくて堪らぬので、さつきからさん／＼に泣き叫んでみたが、蠅は相手の無力を見くびつてなかく立去らうともせず、却つて乳の香を慕つて寄つて來るばかりなので、ついに泣き疲れ、泣き切つて、半ばうと／＼眠りながら、なほ微かに

絶望的な悲鳴をあげてゐるらしい。

「これは堪らん。」

さう叫んだかと思ふと、梅村は草履のまゝ板の間へ上つて、つか／＼とツブラの側へ行つた。蠅は多少逃げ去つたが、なほ大部分は赤ん坊の顔に黒々と留まつた儘でゐた。彼はいきなり扇子を開いて、ツブラの上を二三度大きく煽いだ、蠅の黒い集團は唸りを立て、やうやく赤ん坊の顔から離れ、家ぢゆうへバツと飛び散つた。「ひどい蠅でござりまするナ」源八（家來）もいさゝか呆れた風で言つた。

「蠅もひどいが、親もひどい。赤ん坊をよくもこんな風にして打つちやつて置けるもんだ。」

「田甫が忙がしいのでござりませう。」

「それは分つてゐる。でも、いくら忙がしいと申しても、何とか方法がありさうな

ものだ。まさか赤ん坊を負ぶつて田植はできないかも知れぬが、赤ん坊を家に一人だけ棄て置いて、蠅にさん／＼たからせて置くといふ法は無い。」

彼はムキになつてさう言つた。そして振返つてみると、蠅の黒い群はまたもや赤ん坊を取巻いて、ブン／＼唸りを立てながら、その乳くさい小さい顔の上へ留まる機会をねらつてゐた。赤ん坊は相變らず消え入るやうにヒイ／＼と泣いてゐる。彼は再び扇子で蠅の襲撃から赤ん坊を護りながら、殆んど癩癩に近い聲でどなつた。

「源八、早く行つて親共を探して來い。」

かくて、田植中の母親が呼びつけられて、梅村知事にひどく叱責される。殿様に叱られて、母親は恐縮してひたあやまりにあやまりはするが、實際のところどうしてこんな事でこんなに叱られるのか分らない。だつて、こんな事は昔からやつて來たことだし、誰でもやつてゐることだし、別に赤ん坊に害があるとも思へないの



ツブラの中の子

ことであるし、第一、蠅に毒があつて、蠅にたかられて病氣になつたなんて話を聞いたことがないから。村人もこのいきさつを聞いて、殿様と云ふものは只百姓を叱りさへすれば良いやうに思つてゐる、と梅村を何か無法な暴君のやうに怨みを抱くのであつた。』

「山の民」に描かれてゐるのは明治維新の際のことであるが、かうした事實は、今日でも山村へ行けばいくらでも見られる。先頃某村でこの話が出たが、土地の村長始め有力者が、「子供の時、蠅にたかられて泣き切るので、みんな大人になつてから良い聲で唄もうたへるし、聲も立ちますんぢや」と冗談半分この事實を認めてゐた。實際百姓家へ行つてみると、蠅はやさしい方で、ノミやその他のものが赤ん坊を容赦なく螫してゐる。それどころか、時としては赤ん坊が山犬に噛まれたと云ふやうな惨事が起つたり、猫に手や足の指を食はれてゐたといふやうな事さへあつた

のである。萬一遠い畑へ行つた留守に火事でも起れば、赤ん坊は焼かれてしまふのである。そして山村には火事は珍しい事ではない。

初めて生れてくる男の子が特別に珍らしがられ、大事にされることはむかしも今も變りが無いと云へる。しかし次々に生れてくるものは、特にそれが女である場合には、とかく歓迎されないのが一般の傾向である。都會ではこんな傾向は殆ど消滅しつゝあるが、飛驒のやうに封建的な遺風の色濃く残つてゐる土地では、その事が特にきはだつて見える。今次の戦争に出征してゐても長男と、それ以下の子弟の場合とでは親たちの關心も大分違ふ。某家では逞しい三人揃ひの男子がゐて、長男がまづ出征した、その時近所の者がその家の老婆を慰めるつもりで、「お宅には立派な息子さんが三人もゐられるんで、一人さんが出征されても御心丈夫です」と云つた。

すると老婆は色をなして

「アニ(長男)はアニとして子供の時から、こゝの家の跡を取らせる様に育てゝあるんぢや、オジ共(弟たち)が幾人ゐたつて、アニの代りにはなりません」と云ふ返事だつた。

また別の老女は明るい、こたはりの無い調子でこんな風に云つてゐた。

「アニはお役にも一向立たなならうが、無事に戻して貰ひました。今行つてゐるのはオジです、お國のお役に立てば結構です。死んでも惜しいことありませんで、せい出して務めて来てくれりやよござんすが。アレも己れが手柄を立て、戦死したら、親孝行したと思つとくれとのことでしたわい。」

これが長男とその他の子弟とに關する親たちの偽らない感情と云つて良い。しかし今日では「生めよ、殖やせよ」の時勢でよほど事情も變つて來たし、さうでなくて

も、田舎なりに進んだ家庭では、長男と云はず末女といはず、愛育上に昔のやうなひどい差別はつけなくなつてゐる。それでも女と云ふものはいろ／＼な點で厄介なもので、しかも一人前に育てた上で他人に貰つてもらはねばならず、しかも後で委しく説くやうに縁づけた後までも生家で面倒を見なければならぬので、女の子が、しかも幾人も生れることはとかく厄介ものが生れたといふ風に考へられた。考へられたばかりでなくそのやうに扱はれた。しかし實際は、農家では女の子は早くから家事に間に合ふし、娘になれば十六七から女一人前の野ら仕事をして、重要な役目をするのであるが、むかしの男尊女卑の思想にはするぶん根深い、頑固なものがあつた。近頃の若い娘はこんな馬鹿げた事は云はなくなつたが、年寄の女たちは、「女房(女)つてものは損なもんぢや、たゞあくせくと働いただけで一向楽しみも無くて」とか「今度生れて来る時は、どうしても男に生れて来んならん」とか云つて嘆いたりす

る。尤もむかしの女の境涯は、今の我々に比べるとずつと煩雜な苦勞の多い辛いものであつたのだから、無理もない。

かと云つて、ツブラにゐる中から男と女が區別して待遇されてゐると云ふのではない。何にせよ大事な長男でさへ、ツブラの中で蠅につゝかれ、蚤にさゝられて育つことに變りが無いのだから、他は推して知るべきであらう。

この幼いものたちの食べ物について云へば、母乳の間はまづ良い——過勞な、栄養不良な母親のあまり良質ならぬ乳でも。不幸にして母乳が無くても、都會のやうに牛乳を買入れる事が出来ない。だから重湯か、米をすりつぶして煮たもの等で育てられる。離乳の時期が来れば、赤ん坊を待つものは奥村相應の粗食である。それは粗食の名をもつて呼ばるべきものであらうか。

もし都會の人たちに向つて、山村の百姓たちの常食がどんなものか知つてゐるか

と聞けば彼等はきつとそれはごく粗悪なものに違ひないと想像するであらうが、恐らく答へに窮するだらうと思はれる。大部分の人たちが、現在でも稗が常食の一部である事を知らぬ上に、その稗と云ふものを知らぬに違ひないから。特に断はつて置くが、今日では飛驒にも米食が一般化した。私はとくに古いこと、少くも明治時代のこと、とは云へ割合近頃までつゞいてゐた事について語つてゐるのである。

江戸時代には、すなはち明治維新までは、百姓にとつて自ら生産する米は、年貢のためのものであつて、自分たちが食ふためのものではなかつた。年貢の後に残つた節供用の幾らかの米とくす米、稗と麥等の雑穀が食料であつた。これはあへて飛驒にかぎつたことでなく、全国的にさうであつたのであるが、この傳統に従つて、明治時代末期になつても、百姓の主食はまだ稗または麥であつた。飛驒では稗食が普通であつた。今日でも奥村では稗を食べてゐる。殊に時局下稗も以前より大事に

されてゐる。しかし現在の稗食は米が二割、三割、乃至五割混入されてゐる。これが昔は純然たる稗飯であつた。白い米の飯を食べさせて貰へるのは節日と特に重要な労働日であつた。即ち正月の三日間、田植、肥出し、まゆ分け等と云ふ日で、彼等の眼にはこの白い飯が白く輝いて見えたに違ひない。白川村木谷の大家族員の一人の老人が、大年の晩、年取の膳に向ふと、白い御飯のよそはれたお茶碗を額の上までいたゞいて、

「天子様の召上る白い飯を、己たちも頂いて勿體ない」

と心から勿體なさうに言つてゐた。とそれを幼心に不思議に思つてみてゐた同家出身の老女がそれを話してゐた。

お前どこじやな××の奥か

米のなる木を知らまいが

こんな民謡があるが、この奥村邊では、死んでゆく病人の枕もとで、米粒を入れた竹筒を振つてきかせて、これが米だと話してやると云ふ。この誇張された振米の話は、飛驒だけでなく山國のどこにでもある、おどけた話としてよく語られるが、まんざら誇張とのみ云つて片づけてしまへないものがあるやうな気がする。

純粹の稗飯と云ふ言葉を使つたが、それだけを主食にしてゐられるところは、村のうちでも上等な家々であつたことを呑みこんで置かねばならぬ。一般百姓は普通稗の糠飯と云ふのを食つてゐた。稗糠は、今日では馬さへもあまり喜んで食はないと云ふ代物なのである。糠飯はあたゝかいうちはまだよかつたが、冷えると糠だけが鼻息で吹き飛んで、とてもまずくて、食べにくかつたとそれを食べてゐた年寄たちは思ひ出話をしてゐる。

ところで、多くの農家では、稗飯にしる糠飯にしる、それだけで一年中を食ひつないで行く事が出来なかつた。奥村では農作物の半分位は稗を作つたもので、畑に作り、水田に作り（米の出来ない高地の水田、現在でも平湯地方では水田に稗を作つてゐる。）ナギに作つた。飛驒でナギと云つてゐるのは、いはゆる焼畑のことで、畑にならぬ様な峻しい山の傾斜面を焼き拂ひ、施肥なしで稗やそばや豆などを作る到つて原始的な耕作法で、今日なほ白川村や丹生川村のやうな奥まつた山村でかなり手廣く行はれてゐる。

そんなに稗を作つてみても、もと／＼山ばかりで田畑に乏しい土地柄のことで、全村が稗ばかりを食べてゐられる程充分には取れなかつた。どうしても他の雜穀で補はなければならぬ。この補食の類も村々の土地柄によつてかなり異つてゐる。ナギの盛んな土地では、稗ダンゴにそば餅などがある。（これ等については後に委しく述べる）比較的米の取れる所ではセイナ米と餅草に依る、草餅が重要な食料にな

る。白川村や北飛騨では枳の實を盛に用ひる。それをコザワシにして團子に作つたり、セイナ米と混ぜて餅についたりする。枳餅などと云ふと、都會の人には何か風雅な味を聯想するかも知れない。もとよりそんなシャレたものではない。毎日の食事の事だからつい苦味も十分取り切らず、我々にはあまり楽しい食事ではない。これを稗飯の前に食べて、稗飯を節約したのである。小晝飯なぞの場合にはこれだけですませたりした。

さらに乗鞍と御岳の麓の村々、阿多野地方へ行くと、檜の實が大切な補食であつた。一年の間に一大家族で大きな俵に十俵位食べたと老人が話してゐたから、食事のかなり大幅の部分を占めてゐたと云はなければならぬ。この他クス根、ワラビの根も食べた。有毒なホヤ(寄生木)さへ食べてゐた。野山に自生する雑草、木の芽は云ふまでもなかつた。と云ふと、それは飢饉の時の事であつたらう、と反問される

方もあるかも知れない。しかし、これは平時のことだつたのである。勿論昔のことではあるが。

こんな有様であつたから、特別に恵まれた機會でもない限り、子供たちのための菓子と云ふものが無かつた。近年は大分事情が變つて來てゐて、事變以前までは街道筋の茶店や雜貨屋などに、たいてい二三種の駄菓子^{だ菓子}が並べられてゐて、村の子供たちのあこがれの的になつてゐた。お菓子が配給制度になつて、これらの子供たちには、以前よりずっと餘計に當る様になつてゐる。切符を貰ふとつい買はなければ損な様な心理になるのは、誰も同じらしいので。と云つても貰つた切符全部を買ふ様でもないらしく想像される。

奥山の村の子供たちの菓子と云つたものは、主として栗とかガヤの實、山野に自生する果實、木の實類であつた。白川村の大家族は大晦日の晩一番鶏が鳴くと一同

宮参りに行くが、宮参りから歸ると家長のカカが、銘々盆に入れたお菓子をお呉れた。小柿、栗、ガヤ、柿、豆、アヲレ等の盛合せで、これをこゝでは「お菓子」と呼んでゐた。菓子と云ふ言葉の本來の意味は、恐らくこゝにあつたらうと思はれる。

時局下、代用食が盛んに奨励され、同時に研究されてゐることは、みなさんの知つてゐられるとほりである。そして、時々、さうした研究者が當地へもやつてきて村びとを集めて熱心に代用食を宣傳される。その熱心さには我々も心うたれるものがあるが、前述のやうな粗末な、今様に云ふなら代用食で育つてきた人々が、さうした講演をきかされてどんな心持がするであらうか。殆んど稗食ばかりの村々へ、急に白米が配給されることゝなつたり、川の流れでのみ顔を洗つてすましてきた百姓たちの中へ、洗面器が配給されたりして、新しい配給制度は時々素朴な百姓たちを面くらはせてゐる。それといふのも代用食の宣傳と同じやうに、われ／＼はも

つと慎重な態度で村びとの民俗と生活を學んで、理解してかゝることが必要なのではあるまいか。米が本來日本人の主食だとすれば、少くも飛驒の山村の百姓たちは、大昔から代用食ばかりで育ち生きてきたのであつた。

農家は忙しいものである。それは小さい貧しい百姓でも同じことであつて、殊にいはゆる農繁期ともなれば、「猫の手でも借りたい」ほどの忙がしきである。だから子供でも殊に女の子であれば、七つ八つぐらゐになれば、それ相當に追ひ使はれるさしあたり小さい弟や妹の子守をさせられる。よく村を歩いてゐると、小さい女の子が、おほかた自分ぐらゐもあるかと思はれる大きな弟妹をおんぶして、よち／＼歩いてゐるのを見かける。

今では農繁期の村々に托兒所が設けられるやうになつたので、よほど變つてきた

が、それでも奥まつた山村へ行くと、今日でもなほ四五年生位の女の生徒が赤ん坊をおぶつたまゝ教室の席にかけて、授業を受けてゐるのを見かけるのは珍らしくない。子守をすること、そして時々田畑で働いてゐる母親のもとへ乳を貰ひに通ふことは仲々の手傳ひなのである。もしお守りをする赤ん坊が無ければ、學校を休ませられて、百姓仕事を手傳はされる。十歳を越えればまご／＼しながらでも田植の手傳位は出来るし、何よりもこの年頃から仕事を覚えねば、男でも女でも一人前の百姓にはなれない。

まだ義務教育などといふ事の叫ばれない昔では、女の子供でも相當にひどく働かされたのである。その時分には、前にも述べたが山村では盛んにナギを作つてゐた種をまく時にも高い山の頂きまで連れてゆかれたが、それにも増して辛らかつたのは、そばや稗のみのる頃であつた。それは、その頃になると折角みのつたナギ畑を

夜毎に猿や猪が群をなして荒して仕方がなかつた。そこでナギ畑の中へ小さい夜守小屋を作つて番人を置いて、夜どほし鳴子を鳴したり、大聲でわめき立てたりして猿や猪を近づけない様に努めたものである。この夜守にこんな民謡が残つてゐる。

どうづき引きやるなら

ちやんから、どいと引きやれ

したの田甫へ、猪が出る。

しゝよう猪よは、ねむたのさかり

とろりしたまに

ひと谷に、なめられた。

この徹夜の夜番は多く年寄と子供たちの仕事であつた。手のない家では女の子でも、眠たいさかりを、毎夜夜守小屋につめて、夜中獸を追ふにかゝつてゐなければ

ならなかつた。そしてつい眠さにまけて、トロリと眠つてしまつて、民謡にあるやうに、一夏の丹精の大切な作物を獸の群に食ひ荒されてしまふ事もある。その責任者として、親に叱られるのはもつと辛かつたに違ひない。山中の某老人は十歳位の時、夜守から朝歸つて来る時夏草を一負おねて歸らねば、母親の機嫌が悪かつたので、毎朝ウンと負ねて歸つたと話してゐた。

最近、組合病院や保健所の調査をみて非常に驚かされたのであるが、高山附近の或る村では、平均壽命が三十四才何ヶ月であり、他の村では三十二歳いくらであり最低の村が三十一年八ヶ月となつてゐる。これでは平均壽命が低いので名高い印度とさへ大差が無いではないか。しかも私共がかゝる統計をみて意外に思はせられたのは、日常かうした村々の男女をみてゐるのに、いづれも體格もよく健康さうで、

少くも我々より虚弱さうには決して見えないからである。それと云ふのにその平均壽命が、どうしてこんなに並はづれて低率を示してゐるのであらうか。

その原因は云ふまでもなく乳兒と幼兒の死亡率が恐ろしい程多いからである。七歳以下の子供が實に多く死んでゐる。この年頃までに虚弱な者はふるひにかけられた様に落ちてしまひ、従つて非常に體質の丈夫なものだけが生き残ることになる。

それで日常私どもの接してゐる百姓たちは誰も彼も頑健さうなのであるが、平均壽命を科學的に調査してみると、實に上述のやうな悲惨な結果が出て來るのである。

すでに委しく述べてきたやうな無衛生状態、栄養不良、加ふるに過勞、かういふ環境の中に生れてくる赤ん坊に、死亡率の多いのは、むしろ當然の結果と云はねばなるまい。醫者のゐない村では殆んど醫療を受けることなくして、乳兒幼兒の多くは死んでゆく。醫療を受けぬとは云つても、その母親たちは愛兒を見殺しにしてゐ

る譯ではない。醫者のゐない村は、それだけ昔から病人に難儀してゐるから、古い昔からの民間療法が恐ろしい程澤山に言ひ傳へられてゐる。病人が出来ればまづこれを試みる。民間療法と云つても、人々の長い経験の集積から生れたものであるから、中にはなかく合理的な科學的なものもあるらしく、むげに笑ひ捨てる事も出来ないものがある。しかし多くは私共からみるとあまり亂暴で恐ろしいやうなものも少くない。

丹毒にかゝればどぜうをさいて患部に張りつけて置けば良いと信じてゐたり、肺病には、金魚の黒焼を食べさせるに限ると、年よりたちが信じてゐる類である。殊に、呪ひじみた療法になるとそれがひどく、例へば子供がうるしにかぶれたら、漆の木と盃をして來ると良い、とその通り實行して濟ましてゐたり、眼もらひには隣りの漬物を自分のお椀をもつて行つて貰つて食べると治る、と信じてゐて、母親が子

供の手をひいて、漬物を貰ひに行つたりする。その他かうした類の事を並べてゐれば全くきりが無い。

であるから、山村に生れて來て、殆ど放任の中で、遇然にも大病にもかゝらず自らの生きる力で幼児期を通り抜け、とにかく一人前の娘に育つてゆくものは、これだけでまことに伴せと云はねばならない。

娘時代

同じ飛驒のむすめたちでも、その育ち方や生活ぶりが、町と村とでは大變違つてゐるし、また同じ村でも、田甫の多い町近くの村と、奥まつた山村とではかなり違つてゐる。高山の町はすでに市になつてゐる位で、かなり近代化してゐるので、娘たちの生活も、他の進んだ都市とはたいして變りがない。同じ町うちでもその境涯によつて、娘たちの育ち方や教養に大きい差があつたところで、それはどこにでもある事と同じである。

村に育つ娘たちのしつけが、町の娘たちのそれと根本的に違ふ點は、まづ第一に

百姓として、すなはち農婦としてしつけられることである。村の娘としてのしつけそれは炊事から、お漬物から、味噌づくりから、殊に古い時代にあつては、苧うみから、機織りから、針仕事から、家庭的な手工業の一切を學ばねばならなかつたがそれと同時に、百姓仕事の一切も學びとらねばならなかつた。都會の人たちの中には、百姓仕事なんて要するに單純な力わざであるから、強健なものでさへあれば誰にでも出来る仕事のやうに考へるものもあるかも知れない。それは全く飛んでもない考へ違ひで、一人前の百姓となるには、手傳ひをしてゐるのか、邪魔をしてゐるのか分らぬ様にまご／＼する年頃から、教へられたり叱られたりしながら、土になじみ、十年も経たねば一人前の仕事の出来るやうにはならない。一般には、農業が多くの經驗と熟練を必要とする高度な技術であると云ふ事が理解されてゐないやうに思はれる。

先にもすでに觸れて置いたやうに、男も女も十歳前後になれば、早くも農業の手傳ひをしなければならぬ。つまり百姓の見習生となるわけである。かくて、田植の苗取りも教へられれば、山畑へ桑もり(桑つみ)にもついてゆく。ナギ畑の盛んな奥村ならば、山焼の仕度に、秋は稗や粟の穂つみにはげしい山をよぢ登つてゆく。夏の曉、夏草刈りに連れられてゆけば、露にぬれた重い草を子供相應に背負つて歸る。その他仕事は無限にある。あるお嫁さんがこんな話をしてゐた。

尋常五年生の夏、田植後毎日照りが續いて、田へはいる水が毎日に減つて行つた。「青田には敵の田甫にでも水をあてゝやれ」と云はれる程、田に水の要る頃、山田甫の四枚へ仲々水があたらぬ。少女の父が、「お前がもし今晚一晚ついてゐて、あそこの田に水をあてゝ來たら、前々からはしがつてゐる字引を買つてやるが、どうぢや。」と云つた。少女は字引を買つて貰へる嬉しさに、むしろ一枚持つて畔に夜

通し坐つて水加減をしてゐた。その時、三日月は曉方東の空に出るものだと云ふ事を発見してびつくりした、と。

農業労働だけでなく、山仕事にも女の手は必要であり、また野菜類を町へ賣りに出るのも殆ど女の仕事である。私は飛驒の山間で、若い娘が一俵の米を背負つて峻しい山路を行くのに出會つたことがあるが、聞けばこんな事はむしろ普通ださうである。村の女たちの胸と肩がいかにも見事に發達してゐるのは宜なるかなと思ふ。

見事に發達してゐると私は書いたが、全く健康さうな村の娘たちが、甲斐々々しい身仕度で元氣に働いてゐるのはまことに美しく見える。元來飛驒は美人系だと云はれてゐる。白川村の女たちの顔たちの良いのは、平家の落人の後裔だからだとか——勿論これは何所にでもある落人傳説の一つにすぎないが——山中の娘たちの色の白いのは栃のコザワシを食べるせいだぞとか云はれてゐる。

色のしろいは山中の女郎さ

栃のコザワシ食うたせいで

こんな民謡があるが、栃のコザワシの精分と色白と何か科學的關係があるかも知れないが、私は何より、栃の粉の眞白いなめらかさが、それを連想させて、こんな唄になつたのであらうと思つてゐる。何れにしても飛驒の女の膚のよい美しさは、澄んだ綺麗な空氣と、到る所に溢れ出る清水の清らかさにはぐくまれてゐるのであらうと思はれる。

しかし、顔たちの良さより、色の白さよりも生々と働いてゐる村の娘が一番美しい。先年白川村へ行つた時、夏草を刈りに出かける親子に會つた。親子共ミジカにタツツケ、白川村特有のミノゴと云ふ背當をつけ、手に荷繩と鎌をもつてゐた。母

親は中年の農婦特有の落着とひかへめさで、我々の間に答へてゐたし、十二三の娘はじつと側に待つてゐた。この娘専用のために作られるしいミノゴの赤い切れと少女の赤い頬とは鮮かな繪のやうであつた。また山中で、寒中氷の様な小川の側で紙の材料の楮を洗つてゐた、寒さのために頬も手も紫色の様に赤かつた少女の、明るい笑ひ顔も忘れられぬ程印象深いものであつた。

町の裕福な家に生れて、女學校を出ると、やれお花よお茶よと禮儀作法をしつけられ、いろ／＼な手藝を覚え、嫁入り前の娘時代を楽しく華やかにすごす人たちには、村の娘たちの生産的な勤勞の生活は恐らく想像もできないであらう。もしかしたら、その生活の表面だけみてパーマメントもかけなれば、リファインされたお化粧もない彼女たちの娘時代を氣の毒に思ふやうな人があるかも知れない。だが、どうして仲々それどころではない。村の娘たちにとつては、かうして立派な百姓とし

わらび粉を作る娘たち



てしつけられること、百姓たちの表現を使へば、「立派な働き手」「良い手間」となることこそ結局は将来嫁入りの準備となり、花嫁の重要な資格となるのである。農村に於いてはどのやうに美しい娘でも働けぬ娘は禁物であるから。このやうに、山村に育つ女たちは、その娘時代を通して間断なく働きつづけ、生産に參與する。さうすることによつて一人前の農婦として自分を仕あげてゆくのである。

以上はもちろん、同じ村の娘でも、自分の家にとまつてをられるものゝ事である。あまり貧しかつたり、兄妹が多すぎたりする家の娘は町へ子守にやられるか、女中奉公に出された。町では女中を、をなごとかをなご衆と呼んでゐるので女中をしてゐるのを、をなごをしてゐると云ふ。農事のある間だけ家で働き、比較的ひまな冬十二月頃から春三月頃まで、「冬口をあづける」と云つてをなごに出る者も多かつ

た。つまり冬だけ自分で働いて食べ、家を少しでも樂にし、いくらか小遣錢が稼げると云ふ譯である。雇主の方では、五年も六年も年期務めの様に長年ゐて、嫁入りの世話までしてやるをなごに對して、この冬分だけのを「雪けやし」と呼んでゐた。娘時代をすつかり奉公ぐらしをしてしまふものも少くなかつた。

女中奉公より幾分自由で、もう少しまとまつた金の取れる仕事に、工場通ひがあつた。今日では工場の種類も多様であるが、明治時代では、工場と云へば製絲工場であつた。高山の町にも製絲工場はいくつかあつて、この仕事は早曉から夜までかけてぶつ通し休みの無い烈しいものであつたが、高山近郊の村の娘たちは多くそこへ働きに集つた。

ところが、同じ製絲で働くなら、信州の大工場へ出稼ぎする方がすつと金になるといふことが言はれてゐた。そこへもつて来て、信州から工女勧誘のために幾たり

かゝ年々入りこんできて、あらゆる甘言をもつて彼女らを誘つた。それで、高山の製絲工場主らは、工女に對しては、最初の見習時代から堅い契約をさせて、他國へ出ることを制限したが、旅へ出稼にゆく娘たちは多くなる一方だつた。慨して山中に生れて、旅はもとより汽車の形すら見たことの無い貧しい娘たちにとつては、他國へ行くだけでも楽しみだつたのに、女工勧誘者は信州の工場へ送りこむ前に、途中廻り道をして東京市見物をさせてやるなどと云ふので、中には親の許しさへ得ないで飛出すものさへある仕末であつた。このやうにし飛驒の農村からは、年々何百人かの娘たちが信州へ出稼に行つた。娘たちだけでなく、子供を残して母親までが、一時の金もうけのために出かけたものである。

今と違つて工場法のやうな取締りもない時であるし、信州諏訪あたりの大製絲工場の労働は、時間も長く、休日も稀で、なか／＼烈しいものだつた。飛驒の様に山

に囲まれた、まとまつた故郷をもつ者は特に強いと云はれるが、出稼工女の中にはホームシックにかゝるものも多く、病弱その他で辛抱しかねる者もあつた。しかし一旦工場に入れば、簡単には出られなかつた。やがて雪が降つて、寒氣がきびしくなり、年の暮と共に工場が一時閉鎖されるまでは、そこから出ることが出来なかつた。しかし年の暮までには、とにかく幾らかの纏まつたお金——百姓の娘にとつては大金を受取ることが出来た。そのお金の中からさ／＼やかなお土産を買つて、彼女たちは信州から、御岳と乗鞍の間にある野麥峠を、すでに雪の積つた峻しい難路をぞろ／＼と群をなして歸つて來た。時には途中で山賊におそはれて、折角稼ぎ溜めた大金をとられたとか、雪崩に打たれて死んだとか云ふやうな悲話も殘つてはゐるが、さうして歸國する時の彼女たちの氣持はまた楽しいものだつたに違ひない。随分辛い思をして働きつづけたには違ひないが、現にまとまつたお金は持つてゐる

し、これで親の暮らしを幾らかでも助けることも出来れば、又自分の嫁入支度のためにもなるのだから。それに珍らしい旅の話も積つてゐる……

しかし、彼女たちが故郷の村々へもち歸つたものは、珍らしい旅の話や、喜ばしいお金ばかりでは無かつた。彼女たちの多数は過勞と榮養不良のために、いろいろな病氣をみやげにもち歸つた。中にも肺病が一番多かつた。そのために彼女たちが若い身空でつき／＼と倒れたばかりで無く、この悪い病氣を村々へ傳播させた。榮養不良と衛生設備のない村へ、病氣に對する豫防的知識も治療的知識もなしに持ち歸つたのだから、結果は恐るべきものがあつた。今日この空氣の良い飛驒の山村に割合結核患者が多いと云はれるのは、一つにはこのためである。その證據には、近年製絲工女の出稼ぎが殆んど停止してから、肺病の勢がかなり弱つて來たと云はれてゐる。

要するに、出稼ぎが村の娘たちにある利益と喜びを與へた一面を見脱すわけには行かぬが、それと同時に、彼女たちの風儀を悪くした上に、いろ／＼な不幸をもたらした事實をも見脱すことが出来ない。勿論、今日他國の軍需工場その他へ働きに行つてゐる娘たちのことは、時も事情もまるで違ふので、全然同じに扱ふことは出来ない。

それでは、村の娘たちには烈しい生産の勞働があるばかりで、何の喜びも楽しみも無いのであらうか。勿論そんな事はない。やはりそれ相當な娛樂も楽しみもあるしかし常設劇場や映畫館をそなへた都市の娘たちのたのしみから比べたら、それは極めて質素な、つゞましい、貧弱なものであることは云ふを待たない。しかし喜びや楽しみは感情であるから、それが外見どんなにつゞましいものであるにしても、

それらは彼女たちの生活に喜びと希望を與へ、夢を用意する。

ある老女がこんな話をしてゐた。

彼女が娘の頃(三十餘年前)彼女の村(吉城郡上寶村)では高原バカマタカマと云つて、娘たちは朝起きるから、夜寝ぎはまで年中このハカマ、即ちタツツケをはいてゐるこゝとだつた。この高原バカマは、麻布を淺黄に染めたもので作つた。母親に下手だと云つては叱られ、苧ウをうんで、よりをかけ、機で織つて、染めて貰つて縫ふ時の嬉しかったこと。誰でも常着と、ちよいと着と他所よそ行きとを持つてゐたが、美しい女房(娘のこと)が新しいハカマをはいた時なんか、女同志でも見られる位でした。あの嬉しかったこと、淺黄夏着(麻布の單衣)の出來た時よりよほど嬉しかった。彼女はその嬉しかった昔の喜びを、何としてでもこちらに納得させようとして、力をこめて語つてゐた。質素なしかし清潔な喜びである。

まつたく人は誰にせよ、どこに住むにせよ、どんなかの喜びなしに生きられるものでないし、また多かれ少かれ、喜びは誰の生活にもある。

現代では、遊びごとの多い都會人にとつては、お正月やお盆なぞさして特別な楽しみでも無くなりつゝあるが、奥まつた田舎へ行けば、お正月とお盆は待ちに待たれる大行事である。それに村祭がある、この他いくつかの行事の日がある。そんな日には、娘たちもそれ相應の晴衣がきれ、御馳走もある。親類へ遊びに行つたり仲良しと一日中好きな事をしてゆつくり遊べる。町にも出られる、盆踊が踊れる、村芝居も見られる、寺へ廻つて來たお坊さんのお説教もきゝに行かれる。お説教はまあ半分位しか耳に入らぬにしても。殊にシヨイヤの二十七日(七月)には、町近くの村の娘たちは、いづれも盛装して町の本願寺別院へ參拜する。この日は村の若い衆たちも多ぜい集まつてくる、それでこの日は村びとの嫁みたて、婿みたての日だ

と言はれてゐる。

こんな事がどれ程の楽しみにならうかと都會の娘たちは疑ふであらう。しかもその行事の一つ／＼の内容を知つたら、一層その感が深いに違ひない。しかし普段働き続ける村の娘たちにとつては、毎年くり返される行事も、前々から心待ちに待たれる楽しみなのであつて、その健全さと明朗さは却つて都會の人たちには想像されないものがあるであらう。

他の國々には娘宿といふものがあつた。娘宿にも國々に依つて、それ／＼の違ひはあるが大體村の裕福な、信望のある大きな家をたのんで、そこに年頃の娘たちを合宿させる。そしてそこで裁縫や行儀をしつけられる。同時に若い男とも交際させて、結婚の準備をさせることになる。この際娘宿の主人夫妻は親がはりとして、娘たちの世話を見てやる。また娘たちも生涯生みの親同様に大切にする。ずつと昔は

分らないが、ひだには明治初期頃にはもうかう云つた風の娘宿はなかつた。しかし一種の娘宿に相應するものはあつた。それはこんな風なものだつた。

晩い秋か冬である、殊に長い冬の夜は夜なべの季節で、男たちが藁づかひをする一方、女たちは多く芋^かうみに夜をふかす。それを村の一軒を借りて、村の娘たちがそれぞれの芋と桶をかゝへてそこに集まる。そして赤々と焚火のゆらぐ暖かい圍爐裏をぐるりととり圍んで、いろ／＼談笑しなから楽しく芋うみをするのである。そこへはまた村の若ものたちも集まつて談笑の仲間入りをする。さて、夜が更けて娘たちが家へかへる時は若い衆が、かならず二人連れでそれ／＼家まで送つてやる。

かうした宿は必ずしも一定せず、村々の主立つた家々を一夜乃至二夜ぐらゐづつ借りてまはるのであつた。芋うみはどうせ個人的な仕事ではあるが、かうして大勢集つて働く事は、仕事も楽しく出来るが、それにも増して大切な事は村の女として

の常識を養ふ事、自分たちが行つて良い事悪い事を知る事なぞであつた。

これは飛驒にかざられたことでは無いが昔の女は早婚であつた、十六七歳で嫁かたづくのは普通で、十三四歳で嫁づいたものも決して珍らしくなかつた。

村の娘たちの結婚は、古い昔にさかのぼる程部落内で行はれた。飛驒には未だに血族結婚が行はれてゐる村があるなどと、まことしやかに説くものもあるが、それは全く根も無いことで、恐らく村落内の結婚をそんな風に誇張して傳へたものであらう。封建時代は、どこの田舎でも大體さうだつたので、だん／＼世の中が開けるに従つて、遠い部落へも嫁づくやうになり、今では他國へも、滿洲へでも嫁づくやうになつたのである。

結婚はどんな風にして取り結ばれたであらうか。

これまでに繰返し記してきたやうに、村の娘は百姓家にとつては、立派な勞働力である。だから家にとつて必要な存在である。都會の年頃の娘をもつ親たちが、一日も早く良縁を得ようと汲々としてゐるのは、大分趣きを異にしてゐる。簡単に云へば間に合ふ娘をさう安々とはい呉れて仕舞ひたくないのである、この點村の娘は誇をもつていゝ。

大部分部落内の結婚であつた時代は見合など云ふ事は全く行はれなかつた。改めて見合などする必要がなかつたのである。顔ぐらゐどころか娘たちの性癖まで大體村中に知れてゐる、若い衆の場合も勿論同様であるが。

村の婚禮は多く晩秋から春三四月頃までに取行はれる。秋の收穫も濟み秋餅と云ふ收穫祝ひの餅も搗き、親類へくばつたり食べたりする頃は、朝夕の霜もきびしくなる。その頃から、年中ミジカにモ、ヒキカタツツケの勞働姿である村の親父連中

の一人二人が、珍らしく長着物を着て提灯を持って、一軒の家へ屢々通ふやうになると、嫁もらひだと誰にきかなくても村中に分る位である。

昔は實際に良い働き手の娘を呉れたくない親が多くて、幾度も断はつたものらしいが、それが現在では、三度位までは何がなんでも断はらねば體裁の悪い位に考へて断り抜くらしい。貰ひ方も四鞍や五鞍(四へんや五へん)は断はられるのが當り前の事と心得てゐる、ひどいものになると十幾鞍も通つて、やつと話をまとめたなどと云ふのもある。が大抵四五遍目に貰ひ方の方で酒を一本持參して、酒を呑んで貰ひたいと懇願する。この酒を呑んで貰へればとにかく貰へる事になつたので、これを「酒」と呼んでゐる。何度も酒を持つて行つても尙先方で溢つてゐると、先方のお銚子を借りて、自分たちで勝手に酒をわかつて無理矢理呑んで貰つたりする。だから話のまとまつた事を、「酒を呑んでもらつた」と云ふ云ひ方をする。

一應話がまとまると、おつかけ仲人と親類のものが、嫁取りの日取りを双方の都合を聞き合つてきめる。村内の事で顔見知りの仲の事でもあるし、いはゆる婚約時代は餘り長くはない。嫁取りの日が確定するとその前夜、「樽入れ」と云ふ事が行はれる、仲人と近親とが婿を同道して祝言のやゝ軽い位の饗應がある。結納は樽入の夜納めることになつてゐる。村に依つては樽入れの夜婿の同道しない所もある。

嫁入りは多く丑の日か、ねの日に行はれた。丑の日は嫁ぎ先に坐り込むと云はれ、またねの日は生涯ねこんで動かぬと云ふ縁起をかついたものである。

どこかに嫁取りがあるとすると、村中大騒ぎで嫁見物が出る、嫁取りの用意に新らしく張つた障子などあとかたも無く破られてしまふ、また村の若い衆は藁で見事な「高砂」の引物を作つたり、けづりかけを持つたりしてお祝ひに行く、祝はれた家では招待客の他に、村の若連中へとして酒の五升か一斗も出して呑んで貰つた。

翌日嫁は盛装して、近い親類の主婦に連れられ、兩隣りと親類に挨拶に廻る。

この婚禮の仕方は、近年の村の中以上の家の極く普通のやり方である。それも村に依つては多少の差もあり、いはゆる旦那衆や、また極く小さい家ではまた大きな違がある。それにむかしは村々によつてずつと違つてゐた。

例へば上寶村あたりでは、村で一二の大家でも近親以外は、

「嫁さらしい人が近頃みえてゐるが、いつもらひ込みなされたらう」と、村人が噂さし合ふ程靜かに家に入れてゐる。勿論立派な祝言もしないし、嫁の荷送りなどと云ふ事もとよらない。嫁さはさつぱりした他所行き着に新らしい淺黄のタツツケ位で来る。荷物も着換への包みぐらゐしがもつてゐない。そしてはじめ暫くの間は自分の持物全部を親の家に置いておき、季節ごとに着物の取換へに家へ歸るのだつた。幾人も子供が出来てから簞笥や長持を持込むのである。

またこれは乗鞍麓の寒村あたりでちよい／＼やられた事らしいが、婿自身が一升さげて単身で嫁の家に出かけ、圍爐裏のまはりで向ふの親たちにそれを呑んで貰ひ、嫁を普段着の前垂がけのまゝ自分の家へ連れてくるといふ事もある。後で近い親類の二三の人たちに家で一ぱい呑んでもらふらしいが、もとより改めて披露めいたこともしない。事情は村中に判つてゐるのだから、誰も非難するものもなく、結構立派な嫁として村づき合も出来る。しかもこの方法は、以前は割合に多かつたのかも知れない。別に大して侮辱や輕視の念もなく、「前垂れ嫁さ」と云ふ言葉が廣く使はれてゐるところをみると。

いはゆる掠奪婚と呼び得るやうな結婚のやり方をしてゐるところもある。今日でも奥村では時々行はれてゐるが、それを言葉どほりの掠奪婚と早合點してはいけな

い。なるほど、男が自分がほしいと思つた娘を掠奪してくる——もつと適當に云へ

ば、自分の家へ連れて来ることには變りはないが、實はそれは形式上のことで、その前に娘自身はもとよりその両親との話合は既にできてゐるのである。つまり両親承諾の上で、やはりこれも承諾すみの娘を連れて行かせるのである。

どうしてそんなやり方をするのであらうか。外でもない經濟上の理由からである。さう云ふやり方をすれば、お互ひに式をしたり披露宴をはつたりして、澤山の費用をつかふ必要がなくてすむ。女の方でも生涯二度と着ないで仕まふやうな無駄な仕度をしなくてもよろしい。だからこんなやり方をするのは、もとより奥まつた山村の貧しい百姓だけである。もつとも白川村には本當に盗んで來ると云ふやり方があるが、これは白川村の女たちの生活を書く時に、委しく記すことにする。

いづれにしても、かう云ふ結婚の原因が單に經濟上の理由だけに依るものかどうかは、まだ斷言するわけにも行かないと思ふ。かうした民俗の中には、もしかしたら原始的な掠奪婚の傳統が無いとも言ひきれないから。しかし今この問題に深入りすることは止めたい。

大東亞戰爭下の今日では、婚禮の簡單化が極力強調され、かつ實踐されてゐるか、嫁ぐ娘たちも質素なやり方を誇りにこそ思へ、恥づる必要なぞ毛頭ない。しかし私がこゝで述べたやうな簡單な結婚の仕方、云ひ代へれば殆んど形式を踏まずに結婚するのは、民俗、即ち傳統から來るものもあるにはあるが、要するに貧しいからである、華やかなるべき嫁入りをこんな風にして濟ましてきた山村の娘たちは素直で不平がないだけに哀れである。しかも、その先に待つてゐる嫁の生活がどんなものであるかを見る時、その思は一層切實なるものがある。

ヨメサの境遇

嫁と云へば、誰でもすぐに姑を聯想する。そして嫁と姑は、むかしから仲のわるいものと相場がきまつてゐる。もつとも都會では、若い夫婦が兩親と別に家庭を持つ傾向が強いので、こんな厭な関係も少くなりつゝある。しかし田舎はまだこれが大部分である。とはいへ、私がこれから説かうとするのは、單に山村に於ける嫁と姑との關係といふやうなことでは無い。その事ももちろん含められてはゐるが、農家の嫁さの境遇、つまり家庭に於けるその位置を説かうと思ふのである。

ヨメサと云ふのは、云はば飛驒の方言で、お嫁さんのことである。この語尾のサ

と云ふ呼稱は、町では多く目下のものを呼ぶ時につけるので、見くだす意味をもつてゐるが、嫁の場合に限つて、どんな御大家のお嫁さんでも、どこそこのヨメサといふ風に呼ばれるのが習慣である。まして村々では、他人が主婦をカ、サと呼ぶのに對して、嫁をヨメサと云ふのであつて、別にいやしんだ意味は含まれてゐない、かと云つて敬するのでもない。要するにどこそこのヨメサと呼びならはしてゐるにすぎない。これに對して家のものたちは、嫁のことをアネとか、アンネとか呼んでゐるのである。

「花嫁の三日通ひ」

「花嫁は三年道の上にある」

いづれも丹生川村で耳にした言葉であるが、かう云つた意味合の言葉が、飛驒の

村々到るところで云はれてゐる。と云ふのは、當地では花嫁といふものが、それほど頻々と親うち、つまり生家へかへる習慣がある。

それは單に里がへりと呼ばれてゐるやうな形式的なものでは無い。花嫁が何のかのと口實を設けて、親うちへ往來する有様は、都會の結婚生活を見なれて來たものには、ちよつと呆れる位である。それが大家内で十分に手も揃ひ、嫁が少々家を開けても不自由のない家ならまあ〜とも考へられるが、アセチ(分家)して夫婦二人の所でも同じだから、習慣と云ふものは恐ろしいものである。お嫁さんを貰ひたての若い人に、

「今こちらにゐますか」と聞いて、

「こつちの家にゐます」と答へられると不思議に思ふ位である。第一貫つたお嫁さんが、家にゐるか、と云ふ聞方も失禮と云へば、この上もなく失禮と云はねばなら

ない。しかし、さう聞かざるを得ない程、彼女たちは實家へ歸つてゐるのである。それは嫁自身から申出る場合も多いが、それに劣らず生家からまた色々な口實を設けて——田植や養蠶で忙しい時はもとよりの事、ちよつと病人があるとか、温泉へ行くので留守居によこしてくれとかいふ風に——娘を迎へにやるのである。しかも驚いたことには、嫁の家がつい目と鼻のやうな近いところにあるのでも、なか／＼目歸りなどはしない。二日三日ぐらゐ泊つてくるのは普通で、一週間位のこともある。では何故そんなに嫁は親うちへ行き、親うちではまたせつせと迎へを立てるのであらうか。

一口で云へば、嫁が嫁入り先で卑しまれないため、嫁の顔を立てるためである。嫁としてはれつきとした、いつでも歸れる親うちのあることは力強いことで、婚家で無法なことにまで忍入つてゐなくてもいゝ筈であるから。

これに對して、婚家ではどうかといふと、何しろこれが昔からの習慣であるから貰ふには貰つたが、親うちへばかり行つてゐて、一向に役に立たぬと思つても、表面は厭な顔も出来ない。随分口やかましいお姑さんでも、

「貰つた當座は、うちの者ぢややら、親うちのものぢややら分らんぞ」とか、

「嫁と云ふもんは、來たては大方自分の家へ行つてゐるもんじや」

とか云つてすましてゐる。習俗ともなればこんな事も平氣で通るのである。この習はしはあらゆる村々で行はれてきたが、さすがに近年段々すたれて來つゝある。

ところが、丹生川村もずつと奥まつた山村へ行くと、一旦祝言をすましてから嫁は一年間親うちで暮らす習慣があつた。かうなるともう時々うちへ歸るところの話では無い。かう云つたやり方は、越中、越後、八丈島などにも行はれてゐるさうで、

そこらでは、家風に合ふか合はぬかを試みるために、半年か一年かを用意されるのだと云ふことである。

土地の者に聞いてみると、丹生川村の場合は、全く経済上の理由からだと言つてゐる。前にも幾度か述べたが、百姓家の一人の娘はすでに一個の出来上つた百姓であり、働き手であり、つまり有力な「手間」である。従つて農家にとつては一つの大切な財産でもある。それを今他家へ呉れてやるのだから、やつてしまふ前にもう一年間自分の家のために働かせるといふ譯なのである。嫁としては嫁に行つてしまへば家の手傳には何と云つても氣兼ねが要る。その前に出来るだけ親うちへ恩がへしをすると云ふ事になる。

このやうにして親うちに残つてゐるヨメサでも、祝言もあげてゐるのだから、婚家に對してはやはり一定の義務がある。と云つたところで、田植とか、養蠶とか、

稻刈りのやうな特別に忙しい時に手傳ひに行く程度ではあるが、そしてこの一年間ムコサ、すなはち婿はどうしてゐるかと言ふと、これはいつでも氣の向いた時に嫁の家へ行くのである。それをみて遠慮のない村の人たちは、

「遠いのに御苦勞じやのう」

とか、

「嫁の張り番に行かつしやるかいな」

などと云つてからかふのである。

嫁を祝言だけさせてなほ一年間も親のもとに留めて置く習慣を、土地のものは單に経済上の理由によるものとしてゐるし、今日ではそんな風にしか見えない、しかしこの習俗にはもつと深い原因があるかも知れない。

古い婚姻には婿入婚といふ形式があるのであるが、大昔は女は生家を決して離れ

ない習慣さへあつた。もしかしたらかう云ふ民俗は非常に古い婚姻様式の名残りであるかも知れない。同時に飛驒の花嫁が初期の間せつせと生家へ歸る習慣も、やはりかうした古い傳統に一脈通じてゐるのかも知れないと思ふ。

それはともあれ、かう云つた新婚の期間、すなはち一年間を親うちで暮らしたり道の上にあるかに見える三年間ほどがすぎると、ヨメサもだんく婚家になじむやうになり、家族の一員としての落つきも出來てくる。さうなれば生家へかへる度數も少くなり、せいぜい村のお祭り、ホンコサマ(報恩講)、それから、春と秋とに洗濯のために二三日かへつて行くぐらゐになる。洗濯がへりについては後に委しく述べる事にする。

農家の家族と云へば、普通には親夫婦があり、兄夫婦があり、それに兄の弟妹、

すなはちヲジ、ヲバがゐる、特別の場合には、父親のヲジ、ヲバなどが同居してゐる事もある。

かうした家族の中で云ふまでもなく當主の父親が主権者で、金錢の出納、農事の一切、佛壇と神棚の世話、一家のやりくりをやつてゐる。もし父親があまりに老年でこれらのことができない場合には、兄が一切の主権を握る。法律上の手つゞきを經て父親が隠居してゐる場合は勿論の事であるが、たとへ正式に隠居してゐなくとも多くの場合さうであるが、事實上兄が家の一切をやつてゐる場合が少くない。

どちらにしても一切の權が兄の手にあるとすれば、主婦の權も同じやうに嫁に移るのが須序である、誰しもさう考へるしまたさうでなければつり合が取れない。ところが事實はさうでなくて、たとへ老主が家の一切から手を引き、家の重大事に相談にあづかる程度になつても、大抵の場合、主婦の權は依然としてカカサの手にあ

る事が多い。家庭的な一切のくり廻しから親類附合、近所附合の振合まですべてカサの権利にあつて、嫁は何一つ一存で振舞ふことは出来ない。ある一つの事について、結果としては同じことになるにしても、カカサの留守中にでも嫁が取はからつては大變出すぎた事になる。

「おつかさまが、ござらんで濟まんが、またにしてくれんさい」と、全く箸を動かす程の軽い事でも一存で計らつてはならない。だから勿論、毎日焚く米の量、今日のお菜は何にするか、今度はお漬物は何を食べるか等、何もかにもカカサの指圖に従はねばならない。徹底したのになると老主はすでに死んでしまひ、主權が完全に兄に移つてからも、カ、サが臺所の主權を握つてゐて、決して嫁に干渉を許さないのがある。こんなのは、

「あそこは、ババカ、サじや」などと云はれて村人もあまり良い眼では見ない。事

實一家の振合から云つても、餘りさかしい態度とは云へない。

右のやうな事情であるから、ヨメサは兄の妻であり、子供たちの親でありながら家庭内の位置は存外に低い。しかもその労働はなかく、烈しい。たとへ、村で一二と云はれる裕福な家のヨメサであつても、男たちと一緒になつて田甫の仕事、畑仕事に出ないやうなものは無いと云つて良い。田植、田の草とり、稲刈りはもちろん養蠶から山仕事まで手傳ふと云ふ風で、なまなかの男子も及ばないほどに働く。

五月一ト月泣く子がほしや

あぜに立たせて腰そらす

これは田植唄であるが、子供でも泣かなければ、ゆつくり腰を延ばしてゐる暇もないと云ふのである。

田植と云ふのは古い民俗が伴つてゐるのであるが、田を植ゑるのは昔は女の仕事

だった。「早乙女」と云つて、普段の日は女の賃金は男の約半分であるが、この日だけは男女共同額、むしろサウトメサの賃金の標準でゆく位である。

それに田植るの日には、昔から日に何度も御飯を食べたり、お餅を出したりする。彼等に云はせると、

「しようばいに(しよつちゆうの意)何か食べてゐる」のである。だから少し大作りをしてゐる家では、炊事係りだけでも三人位ゐてそれで追はれ通してゐる。ヨメサともなれば、いくら人を頼んであつても、手傳ひが来てゐてもうつらやつては置けない。田植から上つて来れば、子供の世話をみながらカ、サの指示に従つて、明日のやわい(仕度)もせねばならない。働きもの嫁なら何かと後片づけをして夜十一時過ぎになり、朝二時にはもう起きてゐる。尤もこれは田植時の事ではあるが、彼女たちは云つてゐる。

「男衆たちは樂なき、田んぼから上つて来れば寝るだけぢやで。オリたちはそれからの仕事の方が、よつほどえらいんぢやで。」

だからヨメサの位置は仕事の方面から見れば、女子衆(下女)のそのやうに悪いと云へばそれまでだが、事實はそれよりもつと苦しいと云はねばならぬ。何故かと云へば、女子衆に對してはそんな苛酷な労働を、第一強ひることが出来ないし、そんな事をすれば、誰もそんな家で働かなくなる、もつとラクな家へ住みかへる事はいくらでも自由であるから。それに使用人であれば少くも給料を拂はねばならない。ところがヨメサは云はゞ無給で働かされるのである。

もとより女子衆同様の激しい働きをするからと云つて、嫁は嫁であるから家から改めて給料などもらはぬのが當り前だとしても、お小遣さへ公然と貰へぬのが普通なのである。親うちへ三日通ひをしてゐる嫁にきたてなら、それも止むを得ぬと云

へようが、五年七年と経過してすでに子供も幾たりかでき、婚家のために全労働を捧げるやうになつてもさうなのだから驚かされる。だから嫁にきてから十年近くも経つたひとが、こんな事を云つてゐるのを耳にする。

「この間親うちへ行つた時少し小遣ひぜにを貰つて来たで、この子に何か買つてやらすと思つたけど、この子はこゝの子ぢやで、ババサマに買つて貰やア良いと思つて止めましたしなぞと。」

親うちでも両親の生きてゐる中は、氣兼ねをしながらも小遣も貰つてこれるが、兄弟の代になると自由にならない。さうなれば亭主から内緒で貰ふか、町へ野菜賣りにでも行つて思つたより高く賣れたりした時、ほんの僅ばかりでもシンガイを作つたりするより外に仕方がない。シンガイといふのは、いはゆるヘソクリのこととて、所に依つては年に一二度賣つても良い薪や何かがあつて、公然とシンガイの

出来る村もある。嫁にお小遣をやらすに置いて、米や雜穀のはかり賣りをするだらうと眼を光らせてゐる姑が多い。また苦しきまぎれに、嫁は穀類のはかり賣りをするものと考へられてきてゐる。姑もその昔は嫁だつたから、その邊の事情は良く分つてゐる筈なのだが、人間と云ふものは仲々聰明にはなれぬものゝ様である。

こんな状態だから嫁が病氣なぞした場合には、もつとも二三日で癒るやうな軽い風邪なぞの時とは別であるが、親の家へ行つて養生するのが普通である。さらに入院でもしなければならぬ場合でも、費用一切は嫁の生家で支拂ふので、たとへ結婚後すでに十年以上も経つてゐて婚家から直接に入院したのであつても、生家が費用を負擔させられることは同様である。それどころか病後の養生の温泉ゆきなぞまで、皆生みの親たちが附添つて世話をみてやる仕末。この方面からみると、嫁入りさせると云ふことは、生家からみると働いたり、子供を生んだりするためにお貸しして

あるみたいである。飛驒では縁談がまとまった時、嫁の親たちの口上は

「間に合はん者ですが、折角のお話で、おあづけします(あつらひます)で、よろしうお頼みします」

と云ふのが、普通である。方言ではあづけるとか、あつらへるとか云ふ言葉の意味は、他國で差上げるとか、とゞけると云ふ風に云ふ場合に使はれるのであるが、婚約の時の挨拶にそれを聞くと、嫁のその後の生活を思ひやつて皮肉な感じを受けるのである。

それは兎に角として、近頃では百姓の中にも、自分の妻とした以上自分の方で世話を見ねばならぬと考へ、そのやうにするものも出来てきたが、まだくそれは少數で大部分は前述のやうな状態を未だに續けてゐる。

病氣の場合でさへさうである。まして婚家で嫁が衣類を買つて貰ふなどといふ事

は出来ない。このことなども、やはり近頃は大分變つてきたが、三四十年前までは嫁が婚家で作つてもらふものと云つたら、毎年一枚の夏衣と田植仕事の仕度だけだった。夏衣と云ふのは田植の日初めてお祝ひにおろして着る着物で、麻の單衣のことである。それさへ嫁自身が婚家から、自分たちの收穫した麻を貰つて自分で績むで、昔は地機と云ふ不便な機で織つて淺黄に染めたものである。この外にお腰にかふ半股引と、一位笠とゴザ、つまり田植の勞働支度である。

何しろこれが古い習俗であるから、いかに不自由をしても、嫁自身も始めつから婚家で着物を買つて貰へるなどと思つてゐない。だから多少裕福な家では、普段着ぐらゐは後から買ひ足してやるにしても、少くも十年位は着物に不自由しない様に嫁入仕度をした。従つて若い嫁様に不似合な地味な仕度が多かつたのである。中には嫁は自分のものだけでなく、婚家の跡つぎとなるべき子供の衣類まで親うちで作

つて貰つてゐるやうな氣の弱い女もある。

私の聞いてゐる話の中でも最もひどい例としては——これは清見村の事であるが——或る家にとてもやかましいババカ、サ、即ち姑がつて、そのために嫁は結婚後四十年の長きに亘つて、自分のものは勿論、子供たちの衣類まで親家の世話になつてゐたといふ。つまり姑の存命中と云ふことなのである。さすがにこの話は村でも大分評判になつて、末だに話の種になつてゐる。これなどは勿論極端な例ではあるが、それでも嫁入つてからまあ十年位は普通である。そして婚家でも嫁の親が生きてゐる間は當り前の事として、自分らは何もしてやらなくても良いときめて平然としてゐる。

或る奥村から、町在の農家へ嫁にきたもう七十幾歳かになる老女が、私にかういふ事を話した。彼女は其の家へ嫁に来てから、夏衣以外に布らしいものを貰つたの

は、やうやく八年目であつた。それも男たちの田股引や短着みじかを作るために、自分で綿を紡いで、手織の木綿のごつ／＼したのが、残つたので淺黄に染めて八尺、はつ掛けにでもしたら」と云つて呉れたと云ふのである。現在なら純綿八尺は仲々羨望に堪へぬ品であるにしても、これらの事實は、我々の常識ではとうてい想像に及ばぬものがある。

ヨメサの境遇もこんな不自由な慘めなものではあるが、それにも増して、折角お金をかけて何くれと支度をして、娘よかれと嫁にやつても、なほその後何年かの間、お小遣をやつたり着換への補なひをしてやつたり、時には病氣の世話まで引受けてやらねばならぬのだから、親たちの負擔と氣苦勞も容易なものでは無い。假に三人の娘を三つの家へ嫁づけてゐたとしたら、この三人の嫁についてそれ／＼長い年月何かと氣骨を折らねばならぬ事になる。嫁三人持つと大きな財産も潰れると云

ふ言ひ方はあへて飛驒だけではないが、或はこんな事情からさう云はれるのかも知れない。嫁入仕度だけの事なら餘程張込んで派手にした所で、大きな財産を傾ける程の事でもあるまいから。

しかも嫁が氣に入らねば、家風にあはぬとか何とか云つて、たつた三くだり半で（事實私は昔の離縁状をみたが、言葉通りちやんと三行半に書いてあるのに感嘆もし呆れもした。その簡單さに。）離縁になり永久に家へ戻つてくる、百姓家にとつて女も男に劣らぬ立派な百姓であり働き手であるにも拘らず、女の子が生れると喜ばないのもやはりこの邊に原因があるのであらう。尤も自分の家でも嫁を貰へばやはり一向に構はぬのだから差引結局同じ事、廻り持ちのお互様といふ事になる譯ではあるけれども。

嫁が生家へ「洗濯にゆく」と云ふ行事も、つまりは先にのべてきた習俗の一つの現

はれと見ることが出来る。女と洗濯、嫁と洗濯、これはどこでもきまりきつた仕事であるのに、何を御苦勞にわざ／＼親の家まで汚れ物をもつて洗濯に行くのであらうか。これはお洗濯と云つても、日常のこま／＼した洗ひ物でもなく洗ひ張りの事である。もとより嫁入り先で洗ひ張りをせぬのでは無いが、そこでは自分と子供以外の人々のもので手いつばいなのである。それに女なら誰でも知つてゐる様に、冬物を洗つたり張つたりして縫ひ直すのには、色々な品を補はなければならない。それをやるにはやはり親うちへ戻つてでもなければ自由がきかない。かゝる風習は今では大方消滅したやうであるが、それでも丹生川村邊にはまだ残つてゐる。

洗濯に行くのは普通春と秋の二回であつた。春ならば苗代田前、秋は外仕事（百姓仕事の全部）がひとまづ片づいたところで、ヨメサは自分の普段着から子供の衣類まで汚れたものを一抱へにして持つて行つた。子守や女子のゐる位の家の嫁なら

子守に子供を負ふはせて、婚家から土産として、丸餅一白、真綿三四かけ、その上子供の着物として木綿の五尺も貰へれば上等であつたが、それでも暫くは大して氣兼ねも要らぬと思ふと、飛んで行く程嬉しかつたとか。そしてもう家の前まで來ると門口から、

「はようお湯をわかいておくれ」とわめき込む位であつた。早速手傳つて貰つて、ほどいたり洗つたりした。

また清見村あたりでは土産は緋の前掛け位のを呉れただけであつた。

滞在日數はまづ二週間、長いのは一ヶ月位もゐたのがあつた。その間に洗ひ張りをし、痛んだ品は買ひ足してもらひ、普段着の一二枚はどうしても買つて貰はねばならなかつた。そして戻る時は、來る時持つて來たとほゞ同様の土産物、また親が娘の顔を良くしたいばつかりに、それよりも餘計に何くれと整へてくれたものを持

つて、嫁入り先へ歸つてくる。歸つても新しい着物の一枚もふえてゐないと姑はあまり良い顔をしなかつたらしい、少くも體裁が良くなかつたらしい。

この洗濯がへりは、勿論その必要から生じた習俗ではあるが、同時にとかく氣兼ねの多い姑と嫁の間の「息ぬき」となつたもので、嫁にとつては、「鬼のゐない所での洗濯」であり、姑にもほゞ同じ位の意味を持つてゐたらしい。それに姑の娘で嫁に行つてゐるのがあれば、やはり洗濯物を持つてそこへ歸つて來る譯で、姑も自分の娘と久し振りで氣樂に暮しも出來るし、餘分の着物の一枚も買つてやるにしても、誰にも氣兼ねなしに濟むといふものである。

「この間はお互に氣がねなしに暮らせて良えのじやわいな」と或る老女が語つてゐたが、こんな譯で、嫁が洗濯に行く習俗も、後には休息の方に主要な意味が含まれて來てゐたやうである。

ヨメサの外に、これは勿論裕福な農家のことであるが、男衆や女子衆、即ち下女や下男にも洗濯にゆくことを許す行事があつた。女は良いとして下男たちに洗濯がへりはいささか奇妙に聞えるが、これと云ふのもつまり休暇の口實だつたのだ。時期はやはり春と秋の二回で、春は五日間秋は十二日間で、土産としては米二升と、真綿二かけぐらゐるときまつてゐた。

お産の際はどうするか。

初産の時に、嫁が生家に歸つてお産をする民俗は都會でもまだかなり一般的であり、ひろく日本に行はれてゐる。飛驒でもこの事に變りはない。ところが、村によると初産だけでなく、三人目位まで一々親家へ戻つて産むものもある。それどころか何人目でも、お産の度々に生家へ歸へる習慣になつてゐる村さへある。

嫁は自分がみもちになつた事を知るとまづ生家の母親に告げる。すると母親は土地の風として、餅がお米の粉を手土産にもつて、「みもちになりましたさうで」と云つて、嫁のことを改めて頼みに行く。朝夕一緒に暮してゐる姑は前々からその事を知つてゐても、改めて「頼み」があるまでは知らん顔をしてゐられる。

この頼みに行くのが大抵三月目くらゐで、それよりも遅くなつても沙汰がないと「うちのアネはまんだ親家へ行つて話さんと見える」などと言はれる。さて母が公然と行くと、そのついでに近所へも、僅ばかりでも干うどんを持つて頼んで廻らねばならない。それがみもちになる度毎の禮儀だと云ふから御苦勞な話である。

嫁がお産に生家に戻るのは、大抵産み月になつてからであるが、二三月前から戻つてゆくものもある。親家では産婆を呼んだり、うぶ着を作つたり、萬端の用意をしてやる。かくて無事にお産をすますと、今度は親類縁者を呼んでのお祝ひや、忌あ

けの行事がある。これら一切親家で世話をみるのであつて、なか／＼費用もかゝる殊に初子でゞもあれば、産衣はもとより宮参りの掛け着物、男ならのし目、女の子なら友禪と云つたものから、ねんねこの三枚位、その他子供用の簞笥まで作つてやる親もある。そして忌明けが済んだところで、母親が嫁と子供を、荷物やお土産と一緒に送り届ける。

「あんばいよう産れましたで、どうかよろしくお頼みます」といふ譯で、またしても頼んで行かねばならない。我々の常識だと、一體どこの家の子供が生れたのかと問ひ返したい位である。

こゝに述べた習俗がかたく行はれるのは、何と云つても中流以上の農家でのことであるが、しかしいかに貧しい百姓同志の間でも、それ相應のやり方で、ほゞ同じやり方が行はれてゐるのである。

嫁の生活は、家々によつていろ／＼違ひはあつても、根本に於いては大體上記のやうに氣苦勞の多い、多忙きはまる、しかも不自由な状態で、五年十年とつゞけられて行く。だから百姓の嫁といふものは、いはゆる密月の楽しさも一向に知られてゐなければ、夫婦だけで楽しい水入らずの暮らしをするといふ餘裕も、生涯に渡つて與へられてゐない。例外としては、家の田畑が不足してゐる場合など、二三里から五六里も離れた奥山へ行つて、山を買つて焼畑を作つたり、新しく田甫を開いたりする場合に、丸太で粗末な山小屋を作つて、幾日かをそこに寝起きして働かなければならない。いはゆる出作でしやくと云はれるものである。そんな時には多く、元氣な兄夫婦が出かけて行くのであるが、こんな時が嫁にとつては、實に楽しい幾日かとなるのであつた。それこそ、民謡にあるやうな、蓆のすき間から月影のあらはにもれ

る奥山のわび住居で、土の上に藁を敷きつめた土間の上、小さい形ばかりの圍爐裏を使つて鍋で煮たきしつゝ、しかも日中は烈しい労働をしつゝの生活なのであるがそれでも尙氣がねがいらないといふだけで、彼女にとつては何にもまさる喜びであつたらしい。

それでもカカ(主婦)の修業時代、見習時代とも云ふべき嫁の生活が、十年か十五年で終り、ついで自分がカカの位置にのぼれるものは、到つて順調な方で幸福だと云へる。長いになると、二十年はおろか、三十年四十年と古いカカサに隷屬して嫁の勞苦に充ちた勤めをつゞけてゐなければならぬ。さうなるとさすがに

「うちのカカサは、いつまでも杓子を渡しなはれんで弱る。」(杓子を渡して呉れないから困るの意)と嫁の方でも愚痴を言ふやうになる。

こゝで杓子といふのは、いはゞ主婦權を象徴するもので、杓子を渡すといふのは主婦權を引渡すことを意味する。で、嫁としては、十年や十五年は已むを得ない事は最初から承知してゐるが、二十年たち、三十年たつてもなほ杓子を渡して貰へないやうでは困るので、最初縁談が起つた時は、親としては行く先のカカサの年齢と性質を大いに問題として考慮するといふが、全く無理のない話だと思ふ。そして萬一相手の家のカカサが四十代の若さでもあれば、容易に杓子を渡して貰へないものとして、折角好ましい縁談でも、つい二の足を踏むといふ事である。

では、いづどんな風にしてヨメサはカカサの位置につく事になるのか。

東北地方では、「杓子渡し」と稱する一種の儀式があつて、家の管理を嫁に引つがうといふ日には、新しい鍋の蓋の上に新しい杓子を一本のせて、これを両手にもつて嫁に手渡しすると聞いてゐる。こんな形式はないが、飛驒にも丹生川村に、やはり一種の杓子渡しの民俗が残つてゐる。別に改まつた儀式はせぬが、とにかくカカ

サも年老いて、もうそろそろ嫁に杓子を渡し、餘生を氣らくに送らうと考へるとそれをやる、これは勿論周囲からの強制と云ふものではなく、要するにカカサの考へひとつできまることである。だから比較的若くても早く嫁に杓子を渡して一切をまかせ、自分は嫁の相談相手になつたり、孫の相手をして如何にも楽しさうに、老いては子に従ふ態度をとるさかしい人もあり、死際まで財布の口をしめて、嫁からも可愛がられず村人からも笑はれてゐるものもある。

とにかくカカサが杓子を渡さうと決心すると、その年の除夜の晩家族一同が揃つて年とりの膳部に向つた時を見計つて、

「あね、みんなの御飯盛らつしやい。」

家族の前で云はれるこのひと言こそ、カカサがヨメサに杓子を渡したこと、すなはち主婦権を譲渡したことを宣言したものである。この時以來つまり翌る年からヨ

メがカカサにかはつて、臺所の一切を處理しうるやうになつたのである。これでみても、農家で杓子ひとつがどんな重大な意義を持つてゐるか分つて頂けると思ふ。

だから若い娘を嫁づけるに當つても、注意深い母親はかう云つて注意してやる。

「大年の晩には、氣のきいた振なぞして、みんなの御ぜんをよそつたりするなよ」と。しかしこれは除夜の晩に限つたことでは無い。本來は普段でもカカの外の者は杓子に手を觸れてはならない筈なのである。

丹生川村以外のところでは、かうした杓子渡しと云ふ民俗形式は、飛驒でもおほかた消滅してしまつた。だから普通には二十年三十年と経つうちに、餘程しつかり者のカカも年を取つて、家事を切り廻すのが臆劫になり、しぜんに主婦権を渡すといふ風になつてゐる。

それで、ひどいになると、私の知つてゐる五十三歳になるカカサが、こんな事

を話してゐた。

「わしが臺所をあづかるやうになつたのはやつと二年前からですんぢや、それまで一切ババサマがやつてござつたで」

その時ババサは七十九歳だつた。つまりカカはババになるまで主婦權を握つてゐたので、ヨメサは、と云つても五十歳過ぎて老人になるまで三十何年間その氣がねの多い苦しい境涯を忍んできたのであつた。

これまで説いたやうに、嫁を嫁入り先の家庭の中でみると、まことに頼りない、みじめな境遇として浮び上つてくる。しかしまた、一旦生家との關係で眺めてみると、事情はまるで違つた光で照らし出される。實際、嫁は嫁入つてからも、その實家に對して家つきの娘と殆んど變らない權利をもつてゐるのである。お小遣はもと

より、出産と病氣の手當から、自分と子供の衣類まで作つて貰ふこと、前述のとほりである。近代風の結婚をした都會の花嫁などには想像も出来ない事である、嫁入つてからなほ生家に對して持つてゐる娘のかうした特權は、いつたい何に由來するものであらうか。

このやうな問題は民俗學上なか／＼興味あることでもあり、また研究題目にもされてゐるが、しかしこゝでちよつと簡單に取扱へない程複雑でもあり、深遠でもある。たゞ私の考へでは、生家に於ける女のかうした特權は極めて遠い古い時代からの、女性の地位と傳統に關聯するものゝやうに見える。後の章で改めて委しく紹介するつもりであるが、有名な白川村の大家族制度の中では、女は絶対に生家から外へ出さぬもの、彼等の言葉を代りれば、

「女は家についたもの」、従つて嫁がぬものといふ觀念が、強い不文律となつて支

配してゐる。何かこれらと相通するものが、嫁のこのやうな位置に對する習俗の中にも潜んでゐるのではあるまいか。

カカサの勤め(二)

—臺所の司として—

杓子が主婦權の象徴であつて、誰でも勝手にいぢることのできないのは既に説いた。云はゞ杓子は農家のカカにとつて、むかしの大臣の笏、武士の刀にも比すべきものなのである。柳田先生の御本には、カカを一般に山の神といふのは、山の神に杓子を奉る風習があるからかも知れないし、逆に山の神が女で山の主なので杓子を奉るのかも知れないと説いてゐられるが、何づれにせよカカが臺所の支配者であるかぎり、杓子でその権利が示されてゐるのは自然である。飛驒の村々では、カカを鍋頭なべがしらと呼ぶところもある。都會の人たちには、この言葉の意味がしつくり呑み込め

ないかも知れない。と云ふのは、都會ではお鍋と云へばお菜を煮る小さなもので、餘程多人數の家でもなければ、徑一尺以上のお鍋なんて珍らしい。普通はまあ三四寸から五六寸と云つたところである。しかし農村では今日なほさうであるが、御飯も大鍋で炊くのである。だから鍋頭と云ふのは飯たき炊事の頭、すなはち臺所の支配者といふ意味である。

これは我々女性には實感をもつて良く分ることであるが、僅か三四人の家族であつても、手落なく臺所の處理をしようとすると、なか／＼大變で、容易な事ではない。都會にはガスもあり、水道もあるので随分手がはぶけるが、農家では炭や薪の手數がまた一通りでない。しかも農家には三四人の少家族なんて到つて稀で、大抵は年寄があつたり子供が多かつたりで家族が多い。従つてカカの役目も大變である。わけても、白川村の中切地方は、いはゆる大家族で有名なところであるが、この

部落の家々には、明治末期頃までは、どの家でも、二十人乃至三十人、特別多いのになると四十人以上の家族を擁してゐた。こゝでは婚姻上、奇妙な風習があつて、主人及び長男の外は嫁をもらはない。そしてそれ以外の男と女は一生正式の結婚をしないで、ひとり身のまゝ大家族の成員として果てるのである。従つてこゝでは戸主の権力と統治力も大きくなければならなかつたが、それにも劣らずカカ力も大きか

臺所のカカ



つた。それを知るために、まづ、大家族の臺所を覗いてみよう。

中切地方は白山の東麓、庄川(射水川)の流に貫流される山また山の奥深いところで、水田は至つて乏しく、耕地さへも僅かしか無かつた。従つて到るところ山を焼いて焼畑を作つた。近頃ではよほど田畑も多くなつてきて、焼畑を作ることも少くなつたが、明治時代にはなほ盛んでこゝには主として稗をつくつた。水田さへもおほかた稗であつた、だから云ふまでもなく村の主食は稗であつた。さうは云つても、何しろ耕地が狭いのであるから、その稗さへも部落を養ふには足らず、その補ひとして栃、檜、クズネ、その他の雑草に到るまで食へるものは何でも食つたのである。

(これは白川村に限らず、あらゆる山村がさうだつたのであるが。)

ところで、百姓といふものは労働が烈しく、しかも長時間にわたるのでどうしても一般に澤山食べ、日に何遍となく食事をする。大家族でも夏は七回冬でも六回は

食事をする、その名稱をあげると、

アサハン

マエビリ

ヒル

ナカチャ

コビリ

ユフハン

ヤシヨク

冬は朝飯がおそいので、マエビリ、即ち晝食前の食事をやめる、もつとも毎回の食事は稗飯ばかりでなく、粟や栃餅を混食したり、また粉(朝鮮稗を粉にしたもの)南瓜、馬鈴薯等ばかりのこともある。ともあれ數十人の大家族に對して毎日これだ

けの食事をまかなふことが、外ならぬカカの責任であつた。

大家族は、言葉どほり、血のつながつたものばかりの集りであつた。(他國には大家族と云つても他人の混じつたものがあつた)従つて召使ひといふものを置きもしなかつたし、置く必要もなかつた。その代り小さくて、まだ一人前に田畑の仕事の出来ない女の子が女中代りとなつてカカサの仕事を手傳ふ。この小さい女の子をコウリヤクと呼んでゐた。カカサはコウリヤク二三人を使つて、臺所仕事の一切を切り廻して行くのだが、食事支度の第一として、まづ毎日の稗の精白をやらなければならぬ。稗は一斗搗いて精白稗三升あれば、上等の稗と云はれるくらゐに搗減りするものだから仲々大變である。精白は水車仕掛のカラスバでやるのであるが不斷の氣くばりが必要である上に、冬などは水の流れが氷つてカラス場が動かなくなることが多い。そんな時は精白した稗が見る／＼無くなるので、カカの氣苦勞はひと

とほりでは無かつた。

カカは毎日次のやうな御飯を用意しなければならなかつた。

稗と米との飯(稗に米一二割)

稗飯(稗ばかりのもの)

ぬか飯(稗に稗ぬかを混ぜたもの)

この三種の飯は、日によつていろ／＼にたかれるのではなく、毎日、三度々々用意されねばならなかつた。また誰かの佛の命日にはオプクサマ、すなはち佛壇に供へるものとして、小さい鍋で米の飯をたいだ。だから日によつては四種の飯をつくる必要があつた。

これらは大家族の中でつぎのやうに配給される。

小鍋の米の飯は佛壇に供へて、下げると子供にやつた。

米を混ぜた稗飯は、直系の男老人と、ごく幼い子供たちに與へられた。

稗飯は大體烈しい労働をする男たちと、直系の老婆のものとなつた。

ぬか飯、これが一般の家族員の食物であつた。カカも皆と一緒になつてこのまづいぬか飯を食つた。大家族の半數以上はこれを食べてゐた。

食事時になると、カカは棚元に坐つて、三種乃至四種の飯鍋を自分の側に置いておく。これらの鍋と杓子には、カカ以外のものは誰も手を觸れる事ができない。或る村々では、お鉢を家族一同のまん中へ押出して置いて、めい／＼が勝手によそつて食へることが許されてゐるが、大家族の中でもしそんな事が許されたとしたら、誰でもおいしい物を頂きたいのは人情だから、たちまち混亂と面倒が起るであらう。そこで杓子はカカが嚴として握つてゐて、家族員のそれ／＼に、各自にふさはしい御飯をよそつて渡してやる。食へる方も自分は何をあてがはれる部類かをよく承知

してゐるし、カカ自身が一番まづいヌカ飯を食へてゐるのだから決して不平を云はない。カカとても決して不公平の無いやうに氣をくばつた。お汁をよそつてやるのはコウリヤクのかゝりで、お菜とお漬物は人々の間に置かれて、めい／＼が勝手にとつて食べてよかつた。ところで、カカサはみんなへの御飯をよそつてやることにかゝりきつてゐたので、皆と一緒に食へる暇がなかつた、いつでも一同が終つてからひとりで食へなければならなかつた。

稗の補食として、栃や檜の實をたくさん食へたことは既に説いたが、これの準備と調理もまたカカの責任であつた。次の記事をよめばこの仕事がまたどんなに重要な、厄介なものであつたかゞ分るであらう。

白川村の大家族では、どれくらゐる栃の實を食へたかと云ふと、私が實地について

調べたところによると、多い家では壘大のムシロを二枚合せたほどの吠に十五六俵、少い家でも五六俵は食べたと云つてゐる。何しろ二十人三十人と云ふ大家族で、いくら補ひとは云へ、おほかた一年中食べつゞけるのだから随分澤山だったことは確かである。

白川村以外の村々でも、大抵の山村には栃の木が澤山あつて、十人内外の家族のところでは、やはり七八俵は必要だったらしい。櫛の實も重要な補食だった事は前にも記したが、年に十俵以上も拾ひ溜めて置いたらしい。

栃と櫛とは天然の果實であるから、稗や粟のやうに營々として耕作する必要がない。せい／＼樹木を保護して、みだりに伐り倒さないやうにすれば足りる。これについて白川村では、栃の木は特別大事にしたもので村の共有の財産として愛護し切り倒す事はもとより、子供たちが幹へよち登つて遊ぶことさへやかましく禁じてゐる。

た。栃の木は保護されてゐたゞけに大きく、こぶ／＼してゐて子供たちには良い遊び場所だった。それで今でも白川村へ行くと、近年大量に切つて賣つたのだが、栃の木が山々谷々を埋めて繁茂し、いく抱へもある大木が到るところにある。従つて栃の實は豊富にある。勿論年に依つての差違はあるが、その採集はかなり厄介で一定の村ぎめがあり(それは村々によつていろいろ違つてはゐるが)、誰でも好きな時勝手に行つて採つてくるといふ譯には行かなかつた。

白川村木谷は、七戸から成る小部落であるが、こゝでは九月半ばすぎた頃、各戸から二人づつ(豊年には三人づつ)アジカ(小籠)を腰につけて毎日栃の實の採集に出かける。拾ひどは全部で十四人のわけであるが、毎年方面に依つて一定の場所がきめてあつて、各自が拾つた分を、アジカにいつばいに成る度毎にそこへ持つて行つてあけて来る。だから皆んなの拾つた實は、一應一緒にしてしまふ事になる。それ

から全部を七戸へ公平に配分して持ちかへるのが古い習慣になつてゐる。かう云ふことが一週間乃至十日間もつづいた。但し最近では、家族も少くなり、栃も以前程必要でなくなつたので、各戸から一人しか採集に出ないが、配分の習慣は依然として守られてゐる。

北飛騨の河合村では、各戸から何人でも出て、特に、栃拾ひ袋として作られた三斗入りの麻袋をもつて、勝手に拾つたゞけ自家へ持ち歸つた。そのかはり、例年九月二十五日が、山の口あけの日ときまつてゐて、それより早くは誰でも採集が禁じられてゐて行かなかつた。

また清見村の奥の方では、官有林の中に栃の木が多いので、一定の日を限つて、村びとはその實を拾ひに入ること許して貰つてゐる。恐らく昔こゝがまだ官有林とならぬ古い時代には、みんなは自由にそこで採集してゐたのであらう。

こんなに苦心して集めた栃の實は、どうして食べるのであらうか。

この食べ方には、つぶのまゝサツシて食料にする方法と、粉にサツシて食べる方法と二種ある。大家族部落では大部分つぶで食べてゐる。

栃の實はまづ外皮をクヅリ取つて灰汁あくの中へつけて置き、一晚経つた所で一握りほど蒸して食べてみる。大體このアクへのつけ方が、カカの腕の見せどころで、サツシ不足の時は苦しいし、アクの過ぎた場合は辛くなる。辛すぎればそれを眞水の中に一夜いれて置く。すると栃の實は栗の皮をむいたやうなものになる。普通は餅粟と混ぜて蒸し、大杵について、ねばりが少ないのでノシ餅には出来ないから、丸い平らな餅にした。餅粟を入れたのより悪い餅には稗ぬか、豆腐のオカラ等を入れ、つなぎにソバ粉をまぶして蒸して餅にした。食べる時は圍爐裏の灰の中で焼き、味噌をつけて食べる時は上等、普通はそのまゝ漬物をつまみながら食べたが、殊に冬

場は、この栃餅を絶やすといふことが無かつた。

栃を粉にサワす仕方には二種ある。第一はコザワシと云つて、採集してきたこの栃を、まだ實の青いうちに入用分だけ粉にして貯へて置く方法である。それには、まづ青い栃の皮をとつて、大鍋に入れて煮る。よく煮えて全部がどろ／＼になつたら、豆腐をよせるやうなものにヌノをしき、その上に煮えた栃をのせる。その上へさらにヌノを蔽ひかける、そしてどん／＼流れ落ちる水にあて、サワシて置く。さうして出来上つたものは眞つ白で、片栗粉のやうに美しい粉になつてゐる。

もう一つのやり方は、サワシドチともコドチとも云つて、栃の實をほして貯へて置いて、必要に應じて粉にサワシて使用する。これをやるにはまづ乾いた栃の實をひと晩熱湯につけて置く。つぎの日になつてふやけた栃の皮を取り、その實を搗屋でつく。時折見まはつて篩でふるつて粉をとる。粉になつたらそれをトチダナに入

れて、前と同様に落ち水でサワすのである。一晝夜ぐらゐで苦味がすつかり取れ、色もまづ白になる。

栃を粉にサワシてお團子にしたり、丸ザワシにして餅に作つたりするのも、時たまのことであれば、また楽しみでもあらうが、稗飯たきと同様この面倒な仕事も、毎日是非せねばならぬとなると、カカの骨折りも並大ていではない。

あへて飛騨に限られたことで無いが、特にこの農山村では、副食の一番主要なものとして云へば、お味噌とお漬物である。と云ふのはお味噌とお漬物ばかりを副食物にしてゐると云つても良いからである。

「味噌漬物が一番の御馳走じゃ、これさへありや外に何がいらすい」などと高笑ひしてゐる百姓を見るのは珍しくない。

そしてこの多量の味噌と漬物をおいしく上手に作ることも、やはりカカの責任であつた。味噌や漬物の漬込みの下手なカカは、農家にとつては針仕事のできないカカよりも劣つてゐると云つて良かつた。

味噌の作り方については、他國のそれと餘り變つてゐないやうに思はれる。たゞ白川村の大家族では多人數のため多量に要つたので、豆と麴だけの良いものを作つてゐては間に合なかつた。それで味噌を作り込む時に豆の半量ぐらゐもヌカ(米の)を混ぜてゐた。柳田先生は、「東京で云ふ糠味噌、關西のジンタと云ふ粗惡な味噌は本來はその材料とする糺しひなから出た名であつたらしい。今日では漬物の床にしか使はぬやうになつたが以前は食料であり、今も伊豫石鎚山麓の村などに之を食べてゐる者があるといふことである」と説いてゐられるが、これで見ると、この糠入りの粗惡な味噌もこゝだけのものではなかつたらしい。

漬物になると、その種類にも作り方にもかなりいちじるしい地方色が見られる。

殊に飛驒は冬が長く、春も五月にならねば新らしい野菜もとれぬし、それだけでなく、野菜の盛りになつても、秋漬込んだひね漬がおいしいと云つて、一年中食べてゐる。氣ばたらきの良いカカなら一年中の漬物に事かくやうな事はして置かない。

江戸時代に出来た「飛州誌」といふ本にも、

「この菜漬なづけをもつて夫食おじきの最も第一たるものなり」と書いてあるぐらゐだから、これについて少し書いて置かう。

十一月も半過ぎになると、高山の町々と云はず、村々と云はず、一せいに「菜洗なひ」が始まる。菜洗なひといふのは、漬物にする野菜を洗ふことで、しかも一年間に使用する分を洗ふのだから、飛驒の年中行事の一つになつてゐるくらゐである。井戸水などで洗つてゐてはとても追つかないので、美しい清水か、小川か、大川の川

上を選んで洗ふのである。何しろもう紅葉もすぎた晩秋の寒い頃で、水はもう手の切れるやうに冷たいが、女たちは、家によつては手傳ひあつて、二日も三日もかゝり切つて洗ふ。

近年は、白菜とか、しやくし菜とか、漬菜類も數多くなつてきたが、明治時代までは殆んど蕪と大根ばかりであつた。蕪は飛驒特有の紅紫色をしたもので、いはゆる赤蕪であるが、こゝでは蕪かまらと云ふものは赤いものだと思つてゐる。頬の赤い女を俗にカブラのやうだといふが、飛驒には實際頬のカブラ色をした女が多く、一種の地方色をなしてゐるのも興味がある。これは高原のきびしい寒氣のせいなのであらうか。

漬物には大體つぎの種類がある。

くもじ (青くもじ、または切漬)

長づけ (ひねくもじ)

しなづけ

大根づけ (たくあん)

酸菜づけ

くもじは、また切漬とも、青くもじなどとも呼ばれる。むかしは、蕪の葉と大根の葉の切漬であつた。近ごろでは、野菜の種類が多くなり、大根の葉など混ぜたくもじは下女下男も喜ばぬので、白菜や、しやくし菜などが大根の葉にかはつてきたやうである。

昔のくもじは、大根の葉を二束に蕪の葉を一束まぜるのが(一束は約一貫ぐらゐ)普通であつた。青くもじと云ふ位で、青いうちに食べるので、鹽はうす味に漬けこみ、三月末頃までに食べてしまふのが良いとされてゐる。つまり冬の間のおかずに

なる譯で、かち／＼に凍みてゐるので、多くは焼いて食べる。焼くと云ふのは金網の上に朴の葉を敷いて、その上に味噌と並べて、くもじを山のやうに盛りあげて、キロリの火に焼いて食べる。

「向ふ側の見えぬほど焼く。」

「こやし棚ほど焼く。」

こんな言葉があるのをみても、一度にどんなに澤山食べるかゞ想像されよう。また煮たくもじと云つて、味噌と一緒に煮ても食べる。くもじは漬けばなしで食べるより、こんな風に焼いたり煮たりして食べる方が多い。

なほ、これは單にくもじに關したことなく、漬物一般についての事であるが、漬物を漬けた時に上る鹽水であるが、この鹽水も決してたゞは捨てない。別の桶に取つて置いて、味噌をかく時の鹽の代用にしたり、綺麗にこして、野菜を煮て

食べたりする。それでも餘分のある時は、牛や馬の飼料にしたり、その他あらゆる方面にこの鹽水を利用する。

これと云ふのも、質素な村人たちは、飛驒は山國でもあり、昔から鹽がどんなに貴重なものであるかをよく心得てゐるからである。

「鹽氣は決して流したり捨てたりしない。」

これは古來からのきびしい原則であつた。山奥の村道を歩いて村へ入ると、村に一軒か二軒ある出店の軒に「鹽」と云ふ大きな字が眼立つが、それが、都會から來たてにはひどく印象的なものであつた。

長づけ、またはひねくもじといふのは、蕪を葉ごと長いまゝ漬けたものである。これは他の漬物を食べつくしてからのものであるから、普通大桶に二本ぐらゐる漬込んである。大方百貫位になる。

この漬物はひねづけと云ふ位で、長期の保存に耐へる必要から、恐ろしく鹽からくつけてある。飛驒は山國で鹽に乏しいから、非常の場合の用心に、殿様からの命令でこんなに漬物に、鹽を混ぜるやうになつたと民間では傳へてゐる。その眞偽はとにかくとして、漬物が同時に鹽の保存を意味してゐることは疑へない。それに堅い農家では、食べ始めが漬込んでから、中一夏おいた三年目であるから、それまで味を變らせずに置くには相當な鹽を入れる必要がある。

しなづけ。これは今日では飛驒の漬物の代表的なものとして名物となつてゐる。後述の酸菜づけの轉化したものかとも考へられるが、種類は全く別なものである。品々を漬込むから、しなづけと稱するのだと説く人もあるくらゐで、材料はいろいろあるが、第一は蕪のボ、葉をとつた蕪である。それから茄子、胡瓜、さづけ、いつと芋、茸の何やかや、里芋のくき、竹の子、南瓜等々が用ひられる。

漬方はそれ／＼の野菜を季節々々に用意して置き赤蕪と混ぜて漬ける。一緒に漬込んだ野菜類が、眼のさめるやうな紅色に染つて、風味も良く、農家にとつては御馳走の一つである。

ところが、しなづけを上手に漬けることは、これまたカカの手練とされてゐる。しなづけは漬方にコツがあつて、誰がつけても鮮やかな紅色になるときまつてゐない。女の手の性で、どうしても紅くならないひとがあるなどと云ふ位である。

大根づけは、他國のたくあん漬だから、特に記述する必要もない。

酸菜づけは、飛驒では随分昔から行はれてゐるもので、いはゞ歴史的な漬物であるから、ちよつと説明して置かねばならない。もつとも今では昔のやうに村々で行はれることなく、局部的に残つてゐるに過ぎない。材料は大根の葉つばで、鹽を少しも用ひず、漬物と云つても、野菜の一種の貯藏法である。大根の葉を熱湯に浸し

て、桶につめ、重石を強く乗せて置くだけのものである。もとよりおいしいものである筈もないが、大根葉の干して黄色くなつたものに比べると、青いだけ幾分増しだつたかも知れない。いづれにしても、飛驒の如く交通不便で、冬期暖い他國から新鮮な野菜の移入の全くない山村にとつては、やはり大事な食料であつた。

大根葉の干したものの、即ちホシバのことが出たので、ついでに干して貯へるものを列擧して置く。

ナツメの實。干して正月などの御馳走にする。

ナスホシ。ナスを薄くきざんで干して置く。

大根ホシ。大根を薄くきざんで、蒸して干す。買つた生のまゝ干したものと違ひ柔くおいしい。

南瓜ホシ。南瓜のうらなりを、輪切りにして干し、春食べる。あまくなつてゐて

おいしい。

ズイキ。他國に同じ。

人參葉。人參の葉の柔い部分を干して、冬油でいため、にしめて食べる。

臺所でのカカの仕事は、なか／＼これだけで盡きるのでは無い。年に一度は報恩講に坊様と親戚一同を招じて、手づくりの御馳走を出さねばならぬ。正月や盆や、祭禮にも御馳走を家で作らねばならぬ。何か事ある度、泊り客のある度に、都會のやうにてんや物を取る便利がないから、自分でうどんや、そばを打つて食べさせねばならぬ。また村ではお豆腐なども自分で作らねばならぬ。

今こそ酒を自分でつくることを嚴禁されてゐるが、むかしは村々で勝手につくる事ができた。自家製の酒と云つても、いはゆる濁酒どぶろくであつたが、それも多くは稗の

ドブ酒であつた。そしてそれを作ることも、分けて吞ませることは勿論共にカカの役目であつた。白川村の大家族などは、随分多量の酒が一同分として要つたらしいが、それをカカがツシの上で、云はゞ臺所の天井裏にあたる所へ桶を置いて、上手に醸したものだと言ふ。粟のドブ酒などもあつたらしいし、それと同時に春先なぞ時折甘酒を作つて振舞つたらしい。

かうして、カカの臺所の仕事を算へあげれば、まだいろ／＼あるが、これだけ書けば大體は想像されると思ふので、食事のことはひとまづこれくらゐにして置く。

カカサの勤め(二)

—手工藝のいろ／＼—

今では村々を歩いてみても、滅多に機を織る音がきかれなくなつた。それと云ふのは、農家でも反物類を、見た眼體裁のいゝものを町の店から買つてすまして、自分たちで織らなくなつたからである。むかしは織物と云へば、カカが差圖して、家内中の衣類及びその他の用品を、自分でも織り、女たちにも織らせたものだった。家庭的な手工類はみんなカカの仕事であり責任であつた。

女たちと云はず男たちもそれ／＼に手工業をやつた。器用な百姓は素人大工ぐらの真似ができたし、戸障子を自分を作るものも少くなかつた。日常身のまはりの

小道具はおほかた手製であつた。今でも丹生川村の奥の部落へ行くと大木を輪切りにしたのをくり抜いて桶にしたり水桶にしたり、洗濯だらひにして使つてゐる。一見如何にも重たげで取扱ひに不自由さうだが、その代り十年でも十五年でも耐久力があるのだ。下駄なども手製品で鼻緒は普段ばきは藁を編んで上げてある。尤も下駄をはくのは少し遠方へ行く時か冬期だけで、夏は大體跣足か自家製の藁ざうりである。いつか丹生川奥の村へお盆に行き合せたら、某家で町へ行つた誰かに、嫁さが雑木の駒下駄にレーヨンの赤つばい鼻緒のすがつたのを土産に貰つて喜んでゐたが、藁の鼻緒の下駄ばかりはきつけてゐると、それでも結構美しく見えるのである。むかしほど農村は自給自足の經濟を營んでゐたわけであるから、手工業も手工藝も當然家庭内で行はれねばならなかつた。しかもさうしたのものにもいろ／＼と村の特色があり特産品さへあつた。現在でもなほその傳統が残つてゐて何村の何と云つ

てゐるが、或る村では藁を他の村では杓子を、もつと外ではスゲムシロと云つた風で、それらの工藝品は冬場の良い内職となつた。内職ともなれば家族總がかりであるが家庭的な必要のかぎりでは、やはり男と女によつて自然に受持が分れてゐた。そして私が今茲で語らねばならぬのは前章に引きつゞいてカカの受持仕事である。

織物の材料として、麻、イラ、綿、シナ、藤、ぶどうなどが用ひられた。しかし云ふまでもなく、麻がもつとも有力で大部分はこれだつた。そしてイラが麻の補ひとして使用された。綿は良いハイカラな品として扱はれた。シナと藤とぶどうはまづたく特殊なものとしてされてゐた。

木綿が手ざはりも良く、自由に染められて良い柄が出来るために、麻よりも實際的に高級品とされてゐたことは事實であるが、傳統的な觀念では麻がもつとも重ん

ぜられてゐたことは次の言葉で知られる。

「麻は絹よりも木綿よりも位が高い。」

百姓たちは古くからさう言ひならはしてゐた。

どの村でも大體同じであるが、白川村の木谷あたりでは、八月の盆踊のすんだ後で、男女數人で麻ひきに出るのが普通だつた。女たちは糸ひきの最中で、畑仕事には出ない時期ではあつたが、麻のためには特に二日だけ休んで出なければならなかつた。ひいた麻は畑で葉を取り去り、莖だけにして家の前へ運んで来る。家にはそれぐの麻蒸ガマが設けてあつた。外の村では、一つの麻蒸しガマを何軒かで共用するやうになつてゐた。高さ一丈ぐらゐ、胴まはり四五尺もある大桶に麻をつめてカマで蒸すのである。蒸した麻からしんを抜いて、皮のついた纖維の部分だけにする、これをカワソと云ふ。

カワソの一部分をアクで煮、暫く谷川水にさらして、それから乾燥するとまつ白なシラソが出来る。シラソは普通織物に用ゐること無く、それで多く苧繩をなはや、ミノゴを編む時の細繩(背負席の一種)を作つた。シロソはこま／＼としたものに使ふ事が多いのでツカイソとも云つて、男たちの使ふものとされてゐた。

これに對して、女の用ゐるもの、すなはち織物にされるものをクロソと呼んだ。クロソはどうして作るかと云ふと、九月初旬、田畑の取り込みの始まる前に、カワソを谷水の中に浸して置いてそのふやけたところを、菜切庖丁形のその半分位の大きい金の物で軽く押へ、麻の根本の部分から引くと、纖維を残して、皮や餘分のものが取れてしまふ。これを干したのがクロソである。

これを織るにはまづ績つまねばならぬ、すなはち苧績をなはである。苧績をなはが始まるとただでさへ忙しい女たちが、手を休める暇もなくなる。よく姑と嫁と苧績をなはみで張合つ

て夜あかしたやうな話がある。苧績の時はクロンをコヌカ(糠)を少しばかり入れて煮て、それを堅くしぼり両手で揉むと糸のやうにバラ／＼にほごれる。これを績む——即ち細い糸のやうにして、切れた所でより合せる。女たちは暇さへあれば徑一尺位から七八寸位の栗色の苧桶(ヲボケ)を絶えず側に据ゑて置いて、麻糸を口にくわへ、絶えずしめり氣を與へながら、両手を器用に使つて績



み績ける。冬場に於ける村の女たちの夜なべと云へば大方この苧績みであつた。

さて績んで、長いまゝもつれぬやうにヲボケに重ねて置いたものを、最初は端を親指と人差指の間にはさんで、毛糸のやうに手に巻きつけ、次に端を無くせぬやうに圓く巻いてゆく。巻き上つたものがヘソ玉で、それを作る動作をヘソをカクと云ふ。つづいてヘソ糸に繕つくろをかけ、更にカセにかける。普通一丈カセにかけて、一丈カセ三つ寄せると一反、幅八寸七八分、丈二丈八九尺になつた。カセからはすした糸は、小さい輪に巻いて、灰汁で煮る。半日ぐらゐ煮てから、石の上へのせ、二人が差向ひで坐つて木槌でたたく。水洗して粟糠をたつぶりつけて、寒い一夜を外氣にさらして凍みさせる。これでやうやく麻の織糸ができあがる。

高山附近ではかなり早くから高機を用ゐてゐたが、山村では明治時代まで地バタ俗にヘタ／＼と呼ぶ原始的な低い平つたい機を使つてゐた。大てい作業はニハと呼

ばれる板の間の作業場で、女は機に向つて板の間へすつかり腰をおろし、兩足を投げ出し、脚を伸び縮みさせつゝ尺餘の大きな梭を使つて織つて行くので、見た眼はあまり恰好の良いものでは無い。普通タテ糸が四十及至四十五筋、時には五十筋もかけた。五十筋以上かけると申分のない立派なヌノ(麻布)が織れた、仕事は一月になると織り始めるが、手のきくものは二月までに十五六機も織つた。一機は一反半から二反、むかしは七ひろ、八ひろと云ふ言ひ方をし、中には九ひろぐらゐる機りつゞけた。地バタ織つてゐる間は織つた布を胸の前に巻込んで置くので、九ひろも織りつづけるのは仲々簡単なことではなかつた。こんな風で女手の多い大家族の中では一軒で五六十反から八九十反まで織つてゐたと云つてゐる。これはみんな自家用いはゆる手前織であつた。

織り上つた麻布は、染めに出す前漂白(さらす)しなければならぬ。それは深い雪の上にひろげて幾條も並べた。大抵二十日ぐらゐは晒しつばなしにして置く。勿論その間に幾度か雪が降つて、麻布を埋めてしまふので、それを掘出してまた雪の上に置く。日光に當らないといくら置いても白くならないのでかうするのである。麻布を玉川あたりでするやうに川で漂白することも、飛驒の村々で行はれてゐるが雪の上で氣永にやる方が遙かに白く美しくなると白川村の女たちは言つてゐる。

麻の補ひとして用ひられたイラは野生の植物で、谷間の水つばい湿地などに多くはえてゐる。丈は三四尺餘にも及び、圓い大きな葉があり、葉の裏に目立たぬ棘があつて、刺されると大變痛い。若草のうちには食用として用ひられ、ウドなどよりおいしいと聞いてゐる。大家族部落では、これを稗にまぜて、イラガユにして澤山食べたと云つてゐる。

秋の彼岸も終つた頃が、イラの採集に良い時とされてゐた。葉に刺さぬいやうに、初めにやけに葉をしごいて置いて根からひっこ抜く。その莖を親指と人指指と中指の三本で軽くもむと、中のシンが皮の部分と離れてくる。その皮だけを二つに裂いて持つてかへる。すぐ水につけて一夜置き、次の日オーヒキと同じことをやって、繊維の部分だけにする。そのまゝ暫く干して置いて、すぐ麻と同様にして績みにかゝる。出来た苧も麻と殆ど同じで、薄みどりがかつて、綺麗にみえる。これをやはり麻と同じに地機にかけて織り、でき上つた布を雪の上にひろげて漂白する。

イラヌノは麻からみると幾分毛ばだつてゐて、持がすつと悪かつた。それでも、麻の出来の悪い年は、カカは女たちと一緒にイラを澤山集めた。何しろ二十人も三十人もの人々の一應一枚づつにしても作つてやらなければならぬのだから、少しも油断が出来ない。弱いイラ糸の多い時は、麻をたて糸にイラを横糸に使つたり、イ

ラだけで織つたりしなければならなかつた。

綿は飛驒では殆んど出来なかつたので、すつとむかしは糸にひくやうに作られた細くなつた綿を町の店から買つて、木綿糸にして手織木綿縞を織つた。明治時代にはカナ糸と云つて機にかけるやうに作られた白い木綿糸を買つて、好きなやうに自家で染めたり、染屋に染めて貰つたりして氣のきいたものを織つた。

養蠶はあらゆる村々でさかんにやつたので、生糸は勿體ないと云ひながらも大分自由に使へた。村のカカサはもとより女たちはいづれも手挽で繭をひいたもので、それをやはり絹物に織つた。むかしから飛驒、紬の名があるが、それもかうして農家の女たちが内職に作つたものであつた。明治以後町に大きな製絲工場がいくつも出来たので、多く繭で賣られるやうになり、家ではほんの自家用を織るだけになつた。また一方、繭から眞綿を作ることは他國と變らない。

以上の外に、眞藤の皮から繊維をとつて、いはゆる藤布も織つた。

萬葉集の中に、

須磨の海人の鹽焼衣の藤衣ま遠にしあればいまだ着なれず(四一三)

大君の鹽やく海人の藤衣なれはすれどもいやめづらしも(二九七一)

とあるくらいで、藤のころもが古く上代から使用されてゐたことが分る。同時に歌からも察せられるやうに、藤ごろもは下々の民が用ひるものであつたらしい。飛驒でもヌノには織つたが、衣服には殆んど作らなかつた。傳説によると、弘法大師さまが藤ごろもを着てをられたので、百姓どもは恐れて藤で着物を作らないのだと云ふことになつてゐる。いづれにしても麻や絹が、古語のいはゆる「和たへ」であるのに對して、藤やシナは「荒たへ」と呼ばれる部類で、飛驒でも藤布は締袋とかお辨當袋とか、お鉢かけとかに作る程度にしか使はれてゐなかつた。

藤からみると、葡萄の方はより多く衣類に使はれた。葡萄といつても野ぶどうのこと、朝日村あたりではブドウフジと呼んでゐる。高山近郊の百姓たちは、エビと呼んでゐる。夏の終り頃これを取つてきて上皮をむいて軽くたゞいてよく煮る。すると柔かい繊維になるので、麻と同じやうに績んで、よりをかけ、地機で織りあげる。短着ミツカにしたり腹がけに作つたりしたが、荒衣あらたへとは云へ、麻のやうに柔かいので子供の着物を作つた。

シナの木は、眞ふじや野ぶどうと同じく、飛驒の山野の到るところに自生してゐる。信濃の名が、本来シナヌ(シナ野)であつて、シナの木が多かつたからだと言ふ學者もあるくらいで、中部山岳地帯には昔から多かつた。東北の山野にも多く、北海道のアイヌ族は、これをヲヒヨウと呼んで、今日でも多く用ひてゐる。彼等のアツシはシナで作られてゐるのである。だから古い昔は、きつと全日本に渡つてひる

く織物編物の材として用ひられたものであらう。

シナは、使ひ途にもよるが織物には良い。しかも日蔭になつてゐる側の皮に使用する中皮が多い。まづ梢を切つて捨て、根本へ皮の部分へだけ切り目を入れ、丸ハギにする。剥いだ皮をアマ皮を中にして二つ折りにすると、鬼皮(外皮)がはがれてしまふ。大體五月から梅雨あけごろにやるので、十分に水を吸ひあげてゐて、作業は到つてやりやすい。ところで、剥いだ皮は使ひみちによつて精製の仕方が違つてくる。繩などにするのは大抵剥いだまゝで谷川にひたして、餘分な部分をくさらせてしまふだけであるが、織物にするにはアクで煮なければならなかつた。また編物にするには沼田に突込んで置いて腐らせるのが良いとされてゐた。これは早くて四五ヶ月、普通一ヶ年ぐらゐ突つこんで置くのである。それを適當な時に取出して、良くもみ洗ひをして、陽で干す。すると綺麗に漂白されて白卵色になる。これをシ

ナハギと云はれる仕方で、薄くへぎ皮のやうにして、それを縦にさいて糸にする。それをやはり麻と同様に績むが、何と云つても木の皮のことであるからもろく、乾くと切れるので、絶えず湿氣を與へてうむ。それを機にかけたり、編んだりする。

これは關西方面でも昔はひろく用ひられた衣類であるが、飛驒でも夏になると、シンベと云つて、短着のやゝ長い、脇にひものついたものを男の人が着た。昔はシナヌノでシンベを作つて着たが、布目が荒いので、首筋や背中などが赤くすれて痛かつたと云ふことである。それで町の者は、百姓の着ふるしたくたびれたやうなのを譲りうけて着たものだといひてゐる。佐渡では現在でもシナ布が見られるさうであるが、飛驒ではもはや織物にはしない。編物としてハバキや、砥石袋を作つたり蓑にまげて使つたりする程度である。

私は「ヨメサの境遇」の章の中で、農家のヨメが、一年の間に與へられる衣裳は、麻のナツギ一枚と、労働用のキレ少しばかりだと述べて置いた。これを嫁の立場からだけみるといかにも僅かであるし、殊に今日のぜいたくに慣れた都會人の常識からみればまるで一場のお笑ひ草ぐらゐのものである。しかし、まづ知らなければならぬのは、これらの品々は買つて與へられるので無いといふこと、更に云へば、あへて全部がカカの手になつたもので無くとも、少くもカカの行届いた配慮によつて、長い間の根氣仕事で手製されたものであり、殊にカカの立場から見れば、單に嫁だけでなく、多數の家族をみんなこのやうにして着せて行かねばならなかつたと云ふことである。嫁は少くも日常それを自分の目でみてゐたゞけでなく、一緒になつて手傳つてきた。だから不平を云はなかつたばかりでなく、勞苦の結晶であるこの僅かな贈物も有り難く思つて、決しておろそかにはしなかつたのである。

ところで、織りあげて漂白した布は染めて着物にしなければならぬ。一般に麻布の着物は、淺黄夏着あきぎと呼ばれてゐたくらゐで、ヌノは淺黄色に染められるのが常識であつた。尤も織つたまゝで漂白せず薄茶色の地色を生かしたまゝ、男たちのジーンベや着物にする事もあつたが。白川村ではなぜか夏着は淺黄に染めないで、男女の共、かならず紺に染めてゐた。

盆ははよきた紺屋は焼ける紺のかたべら白で着る。

こゝでは數も多かつたので、多く國境をこえて越中の城端じやうはなと云ふ町の紺屋に送つて染めさせたと云つてゐる。

しかし大抵の山村では、麻にしる木綿にしる、しくはカカサの手で染められるのであつた。と云つても、今日のやうに自由に染料を買つて染めたわけでは無い。いろ／＼な植物材や、葉や、幹や、花や、果實などを應用したもので、今日云はれる

草木染めである。それらの染料を調査した人からきくと、その種類だけでも百以上にのぼつてゐると云ふことである。そしてこれらは、誰も本から學んだわけではなく、古い時代からの経験を傳承によつて受けついでゐるまでのことで、記憶の良いカカたちは、それらを空んじて知つてゐるのである。藍草の葉からとる藍玉、茜の根にある紅玉、紫草からとるむらさきなどは上代から誰にも知られてゐるが、それらは植物性の染料の中でも高級品で、一般の百姓らにはとても用ひられなかつた。飛驒では紫草が良く出来るから、紫草の試作をするやうにとの、郡代役所の古文書など残つてゐるのもゆかしい氣がする。飛驒は高い土地柄で空氣が澄んでゐて、草花の色が特に鮮かで、ダリヤなどでも東京などで見るものと、花の種類が違ふものかと思はれる程であるから、そんな紫草などに適してゐたのかも知れない。

それは、とにかくとして百姓たちは、彼等の手近の山野に自生する雑多な植物の中から、とにかく自分らに必要な色合を引出して來たのである。現代の衣類の染色のやうなドギツイ色は、彼らには必要でもなかつたし趣味でもなかつたから、結構氣に入つた色が得られた。例へば、紅は紫蘇から、青はカキツバタから、茶褐色は牛蒡、黄褐色は猫柳から、赤茶色は柿、黄色はつつじ、黄緑はザクロから、等々のやうに澤山有つた。

これらの採集した原料は、枯れないうちに細片にして煮つめる。それで染液が出来る。これを使用する時に少量の灰汁を加へ、それへ絹なり木綿なりを、糸また布を浸して、煮染めする。染液が冷えるまでそのままにして置くと、簡単に色のあせない染物が出來たと云はれる。

ある七十過ぎた老婆が話してゐた。彼女たちの若い頃は、今のやうに半衿でも自由を買へなかつた。一生涯を通して二筋か三筋も買へればぜいたくの方だつた。他

は大抵自分で染めて使った。ゾベ糸で(大繭を手でのべた太い節糸)半衿のやうに細く織つて、薄茶色に染めて、模様には露草の(東京で云ふ螢草)花を押花のやうに、布の上に好きなやうに並べて、幾日も押し置いて。するとあの綺麗な薄青色がい具合に染めついてとても綺麗なものになった。今時町で買ったものよりずっと良かったし、嬉しさもくらべものにならなかつた、と。

現代のカカサたちは、町で自由に反物が買へるやうになつたので、以前のやうに麻苧を績んだり、織機に苦勞したりすることが少くなり、自分で染色する法も、従つてどの植物から、どんな染料が得られるかといふやうな貴重な知識も、非常な勢で刻々に忘れ去られつゝある。それでも、たま／＼山村へ行くと、手まめなカカの手織木綿などを一心になつて自分で染めたり、いゝ音を立て、機を織つてゐる前代的風景に行きあたる事がある。

先にも説いたやうに、農村の女は、娘であれ、嫁であれ、まづ一人前の百姓でなければならぬ。カカと雖も決して例外では無い。あへて農繁期とかぎらず、一般農家の主婦はみんなと一緒に、いつも畑仕事田圃仕事に出なければならぬ。山奥へ行つて焼畑も作れば、炭焼きなども手傳ふ。そのやうな烈しい労働を負擔しながらなほ前記のやうに臺所の一切の仕事に責任を持たねばならぬのである。さらに機をりその他女向の手工藝を監督したり、自分でもそれをせねばならない。

しかも、忘れてならぬのは、カカは云ふまでもなく、妻であり母親である。都會に多い夫婦二人の單純な家庭でも、きちんと十分に行届いたやうに勤めるのは、さう簡単なことではない。まして、農家のやうに家族も多く、さうむづかしい姑や小姑でなくても——あるのが普通であるが——その氣苦勞だけでも相當なものである。

子供の世話については、改めて説くまでもない。そしてどういふものか、百姓家には子供が大勢生れるので、普通でも五六人、多いのは十人を越すのも稀れでない。白川の大家族とは別な意味で、農家といふものは概して大家族が多いのはこのためである。私は第一章でツブラの中の子供たちが、充分な愛護も受けられず、殆ど放任されたまゝで育つてゆくことを述べて置いたが、かゝる事情を知悉すれば、あながち梅村知事のやうに、頭ごなしにカカを難詰することもできないと思ふ。

農家のカカサの勤めと責任がどんなものであるか、おほよそは分つて頂けたことであらう。そして心ある読者は、「カカたること、また難いかな！」と嘆息せられるに違ひない。私自身もこれを書きながら、これまでその表面を簡単にしか見られないうカカサの位置に心からの同情を感じずにはゐられなかつた。

カカの仕事は、どんな女も、娘時代から嫁の時代を経て、長い間に徐々に習ひお

ぼえ聞き知つたもので、もとより一朝一夕でゝきるものには無い。それには長い長い修業時代を経てきてゐるのである。もとより村のカカにもいろ／＼ある。健康で頭がよく、まめ／＼しく一家を切りまはして行くのもあれば、同じ健康でも甲斐性がなくて、絶えず仕事をとゞこほらせてゐる、だらしの無いものもある。生來病弱で勤を果し得ないひともあるれば、過勞のためにもう働けないひともある。それはともかくとして、カカがいづれも家事の並々ならぬ大きな重荷を負はされてゐることに變りは無かつた。前時代の主婦たちは現在の主婦について、半は羨しげに半ば腹立たしげに、きまつてかう云ふ。

「己たちの若い時分のことを思ふと、今の女房どもはほんとにラクなもんじや。まるで遊んでゐるやうなもんじやわい。」

これは事實だと思はれる。殆んど織物もしなくなつたし、事變前までは食料も豊

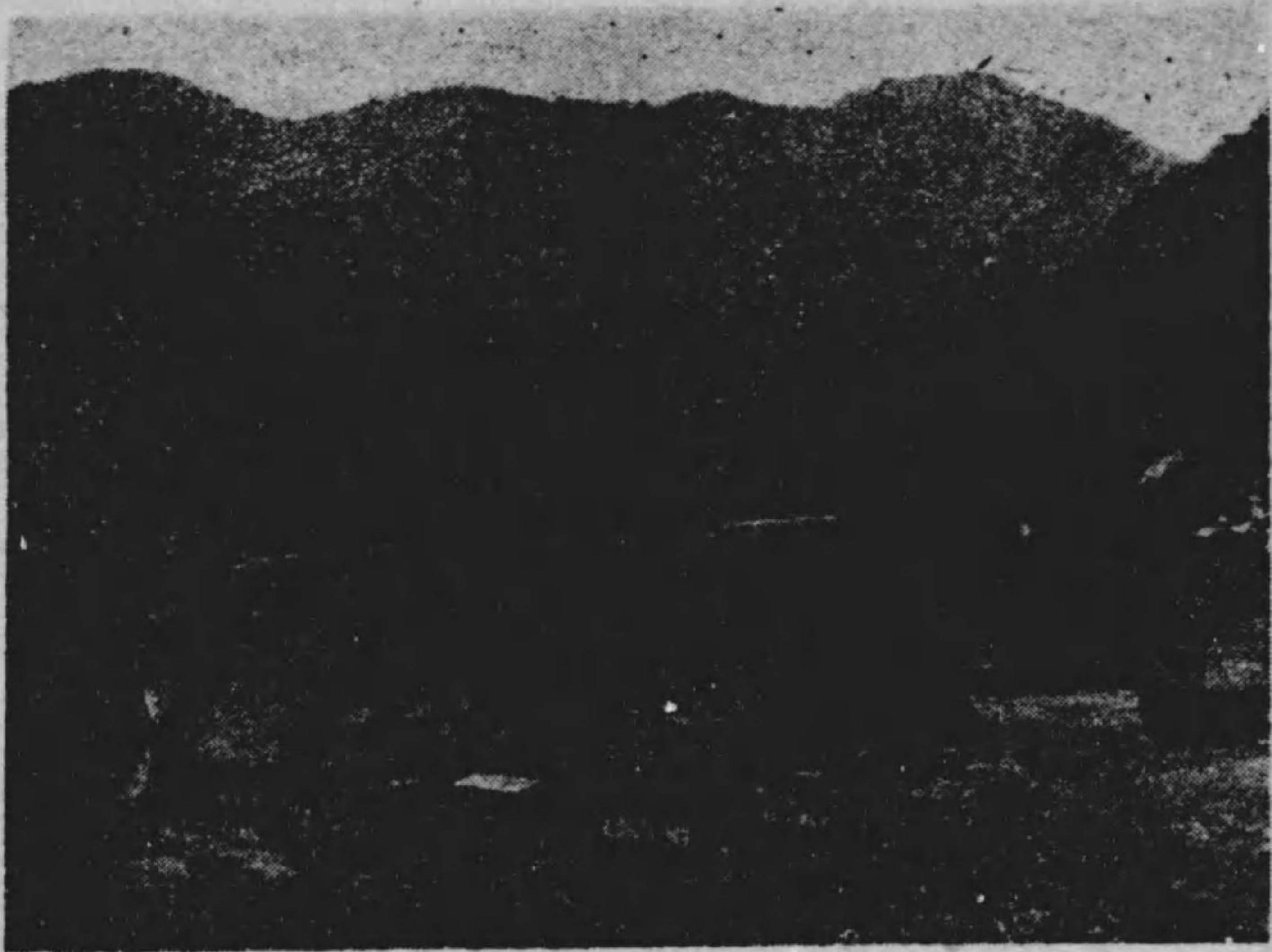
かで、ウドンなどでも手打にしなくても、干したのを買つて置けた。農村の生活が昔よりはるかに裕福になつて、或る八十三翁の云ひ方を藉れば、「昔に比べれば、今の暮しは長者の暮しぢや」となつたことを見脱せない。それに新しい改良農具がつぎ／＼と取入れられて、百姓仕事も以前より簡易化されてもゐる。しかし、これらの事柄にも拘はらず、カカアの勤めが都會人の想像以上に辛い、重いものであることに變りはない。それはカカアが妻であり親であり、さらに百姓であると云ふ簡単な事實からでも言ふことができるのである。

私はいつか奥丹生川の戸數僅に四戸の小さい山村で、三夫婦そろつた農家をおとづれた事がある。そのカカアは八十幾歳と云ふ親夫婦に仕へ、長男夫婦の指圖をして働かせ、孫たちの世話もみてゐた。五十歳前後で額の廣い、心持ち髪のちぢれた、見た所柔和な、どこかしつかりした感じの女だつた。私はそこで家族の人たち

と一緒に食事を御馳走になつた。圍爐裏には御飯の補ひのソバ餅が、串にさしてすうつと焼かれてゐた。カカアはカカザに坐り、驚く程大きな御鉢を側に据ゑて置きみんなに稗飯を山盛りによそつてやつてゐた。その行届いた甲斐々々しさに私は感心して眺めてゐた。私は今更のやうにその素朴なしつかりとした、虚飾のない明るい顔を見直した。仕事にかゝつてゐたカカアの様子には名狀し難い威嚴があらはれてゐた。この威嚴は單にこのカカアのみそなはつた威嚴であるのではなく、カカザに坐るカカアへ傳承されて來た、おかすべからざるものゝ現はれたと云ふことを感じた。おだやかに坐つてゐた彼女は全く美しい立派な存在だつた。

白川村大家族の女たち

白川村の大家族と云へば、そのビルディング風な大家屋と一緒に、古くから日本で有名になつてゐる。この大家族のあつた部落は、白川村でも特に中切とよばれる地方で、その御母衣、平瀬、稗田、長瀬、木谷といふやうなところに、五六軒または七八軒づつ小部落をなして存在してゐた。別の章ですでに述べたやうに、これらはいづれも一軒に二十人三十人、多いのは四十人以上の大家族を擁してゐたものであるが、これはもはや過去のことと、だいたい明治末期から大正の初期にかけてこの特異な家族制度は崩れ去つてしまつた。そして今日では、合掌形の部厚い茅葺屋



白川村大家族部落の一部

根をもつた四階五階に及ぶ大家屋だけが、過去の記念のやうに堂々と残つてゐるにすぎなくなつた。皆さんは、ドイツの大建築家で、かつて日本にも來てゐたことのある故ブルノー・タウト氏の「日本美の再発見」といふ本をよまれると、白川のこの特異な大家屋が、建築學の上からみて特別に優秀なものとして絶讃してあるのを見られるであらう。しかし私がいまこゝで話さうとするのは、

この建物ではない、こゝに古い／＼昔から、最近まで住んでゐた大家族と、その中の女たちの一風變つた特別な生活と境遇である。

どうしてこのやうな大家族が発生したか、いつたいつ頃から始まつたものか、と云ふやうなことは、なか／＼むづかしい大問題で、一方の學者が遠い上代から在つたものだと主張すれば、別の研究者は、いや、そんなに古いものではない、恐らく近世になつて發生したものだらうと反對するといふ風で、學說も一致しない。それはともかく、日本でもあちこちに大家族の部落のある中で、この白川村の大家族が非常に特色があつて、一番に原始的な、古めかしいものであることは到底疑ふことが出来ない。

誰でも大家族と云へば、そこに幾組かの夫婦が寄りあつまつてゐるものと想像するに違ひない。そして、實際に、東北あたりで大家族と稱せられるものは、小さい幾家族かの寄合で出来てをり、その小家族の中には召使ひ夫婦もふくまれてゐるやうである。ところが白川村の大家族になると、その點がまるで違つてゐる。

まづ主人夫婦がある。主人すなはち戸主はト、トと呼ばれ、ゴテとも云はれる。主婦はやはりカカである。すでに隠居した老主夫妻が、ジジ、ババとして残つてゐるものもある。それから長男夫婦がある。長男はア、ニであり、嫁は奇妙なことにヲ、バと稱せられる。ところで大家族の中にはこれ以上には決して夫婦といふものがゐない。それといふのは、主人と相続人以外のものは、正式に結婚しないのがこの大家族での古い習俗であつたから。

では、これらの外には、どんな家族員が住んでゐるかと云ふと主人の弟妹がある。老主の弟妹がある。兄の弟妹がある。それから女たちは正式に嫁入りこそしないが、特殊な婚姻制度があつて、つき／＼と子供を生むからその子供たちがどつさりゐる。

こんな譯で、この大家族はいづれも血のつながつたもの同志の集り、すなはち血縁家族なのである。家族が多いから、下女や下男はゐない。或る種の大家族には、先にも書いたやうに下男夫婦を含み、また未婚の下女下男の大勢ゐるものがあるが、白川村の大家族はみんな血縁者ばかりで、召使がゐないといふところに大きな特色がある。

代々の戸主しか嫁を貰はないとすると、その他の澤山の男女はどうするのか、と皆さんは不思議に思はれるでせう。言葉どほり、男は嫁を貰はないし、女は嫁に行かないのである。つまり男も女も今日の常識からすれば、正式の結婚をすることなく、生涯を獨身のまゝで、單に大家族の一成員として働いて終つてしまふ。

しかし彼等と雖も、結婚生活をしないのではない。たゞそれは今日の法律の上で結婚と見なされてゐる様式では無いといふだけであつて、古來から彼等の間に行は

れてゐる習俗に従つていづれも結婚してゐる。といふのは、男は他の大家族の中に云はゞ許婚關係の妻を持つてゐる。だから女の側から云つても、他の大家族の中に許婚關係にあたる夫をもつてゐることになるのである。たゞ彼らは同居して、一つの家庭をもつことが許されないだけで、それ／＼夫婦關係を公然と持續してゐるのである。どうしてかうした男女は世間並に結婚して、一つの家庭を構へる事ができなかつたのであらうか。その理由はいろ／＼に考へられるし、學問上なか／＼興味深い問題であるが、こゝではこの事に深入りする必要はあるまい。皆さんには唯これが古くからの大家族での不可侵な習俗、すなはち一つの固い掟であつたことを承知して置いて頂けばよい。

それでは、女たちの生む子供たちはどうなるのか。女たちは家庭こそ持たないがそれ／＼夫はあるのだから、つき／＼と子供が生まれる。三人五人はもとより、中

には遠慮なく一人で十人ぐらゐる産むのも珍らしくない。夏の忙しい時など、縁側には赤ん坊を入れたツブラが六つ七つも並べてあるのは、仲々面白い光景であつたらしい。そこへ母親たちが田畑の仕事から歸つて来て乳を吞ませるのであるが、そのやり方がまた變つてゐる。誰でも歸つて来た母親は、まづ泣いてゐる赤ん坊に乳を吞ませる。それは誰の子でも差支へない。その赤ん坊が満腹して泣き止みまだお乳が出さうなら、自分の子供にのませる。だが、前の子供に十分吞ませてゐるから、自分の子が吞み足りない場合がある。すると次に来た母親に渡してまた働きに出かけてゆく、と云つた風であつた。

かういふ子供たちは、一般世間では父親の籍に入るのが普通であるが、この白川村では、例外なく母親の家の籍に入る。つまり女の家の主人が責任をもつて養つてやるのである。決して子供を父親に引取れなぞと云つて、兩家の間にいざこざなぞ

起らない。それどころか、大家族では家族員の減る事を非常にきらつて、後に述べるやうに逃亡した者を二度も三度も探しに出たくらゐで、女たちが赤ん坊の産れることを喜んだらしい。習俗の力といふものはまったく恐いもので子供は女に屬するものとして、つまり當然のこととして女方の大家族が子供たちの世話を見るのである。かういふ風だから、家族が殖えて行くのは當然のことであつて、男女が同居結婚をしないといふ事實と共に、子供がみんな母方の籍に残ると云ふこと、それと同時に、他の農村でやるやうな意味での分家が全くないといふことが、またこの大家族制度の大きな特徴となつてゐる。

子供は母親の家で養はれるから、その養育に心配はないわけであるが、かと云つて何から何まで戸主の厄介になるわけには行かない。着物ぐらゐはやはり母親が工面して作つてやらねばならぬし、學校が出来てからは、本やその他のものも買つて

やらねばならぬ。つまり何やかやとお小使がいる。假令同居してゐなくても、夫はあるのだから、その方から或る程度の援助はあつても、大家族部落での風習では、先にも説いたとおり、子供は母方の家についてゐるのだから、男の援助は全く志程度に過ぎない。どうしても、おほかたは、時にはその全部を、女ひとりの力でとにかく子供を一人前に育てあげて行かねばならぬのである。それも、母親が子供のことにだけ掛かりきりで、もゐられるのならまだ良いが、彼女はつねに大家族の一員として、山や畑に出て、日夜烈しい労働に従事しなければならぬ。だから、小さい子を二人も三人も抱へてゐる母親の苦勞は容易では無かつた。

戸主はすべての家財の所有者であるし、あらゆる大家族員を一家の經營のために勞働させる。そのかはりみんなを養つてやる。しかしその労働に對して、別に賃銀を拂ふことをしない。しかし賃銀のかはりに一定のシンガイ日を與へる。シンガイ

といふのは、關東のヘソクリ、東北のホマチにあたる言葉で、一家の公事とは別に私事を意味してゐる。恐らく田畑の新開しんかいから起つた言葉であらうとされてゐるが、實際に大家族部落では、家族員は自分らのシンガイ、つまり小使錢をかせぎ出すために、狭い山野を切り開いて、新開をやつたものなのである。

このシンガイ日は、古い習慣では五日目毎に與へられる事になつてゐた。この日は男女を問はず、完全に自分の自由に使つてよい日なのであるから、新開で耕作するなり、家からもらつたくすまゆを糸に引くなり、何なり勝手な仕事をして良かった。それで、女たちはこの日を利用して、自分のために、また子供のために、一生懸命でシンガイを稼いだのである。もとよりほそくとしたものであつても、何とかして最低限の生活と養育を保持したのであつて、その労働は彼女たちの言葉の裏から察すると一通りのものでは無かつたらしい。

先にも述べたやうに、明治末期から大正年代にかけて、かうした大家族は解體してしまつた。現在では、他の村々の普通の家族と同様な單婚家族で、白川村の方言で言ふならば、「親子マツイ」ばかりになつてしまつた。かと云つても、現在でも直系の家族の外に、傍系のものを含んだのが全く無くなつてしまつたわけでも無い。有名な御母衣の遠山家には、親子マツイの外に七八人ゐるし、その他にも二人三人中には四五人といふ風に殘存してゐて、大家族の名殘をとゞめる。しかしこの人々は大部分六十歳以上の老人たちで、その一人が死ねば、それだけ古い大家族の遺物が消滅すると云つたやうな、消極的な存在にすぎない。従つて、戸主たちのこれら傍系の家族員に對する待遇も、大家族の華やかだつた當時とはおのづと異つてきて一般的な家族員としての取扱ひを出でない。彼らのシンガイとか、シンガイ休みとかいふものも、おほかた亡びてしまつた。

では、どうしてこのやうに古い歴史をもつた大家族が急速に亡びるやうになつたか。これを明らかにするには、どうしても經濟學、社會學の助けを藉りなければならぬし、簡單には記しえない。それで、こゝでは民俗學の上から、實際に大家族から離れ去つた人々、逃散した人々について、その事情と心理をきゝただけで満足しよう。

いつたい大家族では、男でも、女でも、家を離れることはもとより、他國へ移り住むことなど絶対に禁じられてゐた。禁じられてゐたといふより、さういふのが古來からの不文律であつた。それで大家族から脱け出ようとするものは、勢ひ逃亡するより仕方が無かつた。それで、誰かゝ村から逃亡すると、すぐに搜索され、居どころが分ると連れもどされるのである。ある本には、つれ戻した上で折檻せつかんしたと云ふやうなことが書いてあつて、白川人はそれを否定するが、少くも大家族の統制を

案じたものとして良い目で見られなかつたのは事實である。そんな風で、明治二十年頃までは、大家族部落から逃亡したものは殆んど無かつたと云はれる。かくして長瀬の大塚家には四十餘人、御母衣の遠山家、木谷の東屋兩家には三十四五人、少ない家でも二十人前後の大家族を抱擁してゐたのである。

大家族の逃亡者として最も古いのは、幕末の大力士白眞弓肥太衛門であらう。彼は身長六尺八寸、體重四十五貫と云はれた巨人で、當時の錦繪にも何枚か描かれ、江戸時代の巨人力士としては雷電爲右衛門などと並んで名が残つてゐる。少年時代は木谷の東屋の大家族員の一人だつた。彼は早くから人並はづれた怪力をあらはしてゐたが、何しろ食慾に於ても並はづれてゐて、そのことが大家族の中に居づらくしたのだ、と傳へるものがある。とにかく彼は十三四歳で木谷を出奔した。

舊四月、高山の祭見物に木谷のものが四五人出かけたが、白眞弓(當時奥右衛門)

もその中に混つてゐたのだ。出發の前夜、彼は臺所の片隅で、朴の木をもち出して町ではくために下駄を作つてゐた。彼の下駄だから仁王さんのわらじのやうな大きなものだつたに違ひない。

彼はそれを一足作り、さらにまたもう一足作りにかゝつてゐた。それを家のババが、カカザから目にとめて、奥右衛門にかう云つた。

「汝^{わら}ア下駄を二足も作つて、うちへ歸つて來んつもりで無いか。そんなことなら町へはやれんぞ」

奥右衛門(白眞弓)は決してそんなことは無いと答へた。家のものも、いかにづう體は大きくとも、まだ子供のことだし、まさかと思つて、同行者と一緒に町へ遊びにやつた。奥右衛門は町で連れのものから姿を隠してしまつた。暫くして彼が高山の某醬油屋に奉公してゐることが村へ分つてきた。東屋では二三度町まで連れ戻し

にやつて来たが、彼はどうしても二度と村へ戻らなかつたと語り傳へられてゐる。

白真弓の離村の事情が、比較的よく分つてゐるのは、後年彼が有名になつたゝめでもあるが、同時にその頃には、大家族から逃亡することが異例な出来事であつたためでもあらう。しかしまた、家のババが、彼の下駄を二足作るのを目にとめて、逃亡の意志を疑つたといふことは、その時代にもすでに、時たま村を逃げ出す者があつたといふ事實を物語つてゐるのかも知れない。いづれにしても、それはごく稀なことだつたに違ひなかつた。

逃亡者がぼつ／＼と出はじめたのは、明治二十七八年の日清戦争後であつた。日露戦争の後では目にみえて増加した。そして明治末期には、逃亡者をもはや抑止できなない状態になつてゐた。それでもまだ公然と村を出ることは出来なかつた。家ぢうが寝しづまつてゐる時をうかがつて、こつそりと抜け出したのである。大正も中

期になると、家長から公然と許しをえて出ることは、やはり出来なかつたが、母親と、父にあたるものにその旨をつけて、ひそかに親に見送られて村を出るやうになつた。それでも戸籍まで家から持出すものはなかつた。多くは、十年も二十年も放任したまゝだつた。近年になつて大分籍まで持出すやうになつたが、それでも元のまゝ生家に残してゐるものも多く、他郷で死んでも、骨だけはやはり生家の墓地へ葬られる。最後まで大家族につながつてゐる譯である。

部落の中で、逃亡者を多く出した大家族は、何と云つても一番貧しい家だつた。總じて極めて少数のものを除いては、大家族は貧乏だつた。一家の多数の全労働力をあげて、峻しい山の頂上近くまで切開いて焼畑にして、精いつばいに稗や粟を收穫しても、次の年の收穫期まで食ひつなぐことは困難だつた。それどころか、養蠶期まで持ちこたへることがやつとだつた。それでその後は、他村から稗を買ひこん

だり、柄を一層餘計に食べたり、山野に野生する一切の雑草と果實を採つて食ひつなぐのだつた。かう云ふ貧しいつらい生活の中へ、旅の消息と智識が若いものどもの間へだん／＼浸透してきた。

若い者たちは何よりも軍隊生活によつて他國の生活を學んで來た。それについて出稼がいろ／＼な經驗を教へた。さらに木材會社や水力電氣の會社が、この村のうち大事業を起して、村落經濟の上に大變化を起させるもとなつた。それまで値もなかつた土地が高値で賣れるやうになり、無雜作に焼きすてて顧みなかつた木材が良い金になり、かつ出稼がすばらしい良い収益をもたらした。若いものたちは、それまでのやうに大家族の中で「稗のヌカ飯を食ふや食はずに精かぎり働いてゐて、しかも、妻をもつて家庭をもつことも出來ないやうな、みじめな境遇に甘んじてゐなくなつた。いかに逃亡を禁じる大家族の不文律も、時世の力に抗することが出來

なかつた。かくて大家族はもつとも貧しい家から崩壊しはじめた。

初め頃の逃亡者は何と云つても男が多かつた。それも若い男だつた。若い男の中には、町や他村に落着いてから、女を連れ出しに來るものもあつた。さすがに女は最後まで大家族を守つてゐた。それといふのは、つぎに委しく説くやうに、あくまで「女は家についたもの」といふ傳統的な觀念が、彼女たちの中に深く根をおろしてゐたからである。しかし若い男たち、すなはち一番有力な働き手をつぎ／＼失つて、大家族はいよ／＼窮乏化してきた。さうなると女たちも他國へ行つて女中奉公をするとか、女工になつて働いてみようかと考へずにをられなくなる。外のものもそれを差止めるわけに行かなくなつてくる。

こんな風で、部落の氣風もいつとはなく變つてしまつた。云はゞ近代の嵐が部落を吹きまくつたのだ。大正末期から、昭和の初めにかけては、家長自身が自から進

んでヲジ、ヲバを地國へ出してやるやうになつた。女に子供が出来ると、古來の傳統にたがへて、相手の男の方へ入籍させる。もしくは二人を公然の夫婦にして出稼に出してやる。そして、家長はこれが當り前なのだ、むしろ物の分つたゴテであることを誇つてゐる。實はさうなつた方が、今では、一家の經濟から云つて好都合なのである。

こんな風で、さすがに古い由緒と傳統を誇つた大家族制度も、あの特異な大家屋だけを記念に残して、すつかり亡びてしまつたのだ。

大家族では、男女にかゝはらず、家から出るのを固く許さなかつたことは、既に述べたとほりであるが、この禁制は、殊に女に對して嚴格であつた。

「女は家についたものじや。」

何かにつけてさう云はれてゐたし、女たちもかゝる傳統の中に育つてきてゐるので、みだりにこの禁を犯さうとしなかつた。それで後になつて女まで逃亡するやうになつたのはよく／＼の事だつたと考へねばならない。

「女は家についたもの」、この觀念が大家族の人々にとつてどれほど根ぶかいものであつたかを理解するにはつぎの一事を知るだけでも澤山であらう。大家族では、戸主もしくは長男だけが正式に他家から妻を迎へることを前に説いたが、それさへ明治二十四年頃までは、部落内では容易に求められなかつたと云ふ。假令家長から妻に求められた場合でさへ、つまり減多に得られないかうした良い機會にさへ、その家ではてんで申出を受けなかつたから。

われ／＼現代人の常識では、どうしても呑みこめない事柄である。村の女の大部分、殆とその九十九パーセントまでが、生涯正式な結婚もせず、寂しいひとり暮らし